

## ジョルジュ・ビゴーと明治中期のカトリック教会

——在日フランス人における反教権主義について

山 梨 淳

はじめに

明治日本で多数の諷刺画を製作したフランス人画家ジョルジュ・フェルディナン・ビゴー (Georges Ferdinand Bigot, 1860-1927) がフランス帰国後に描いた作品に、二十世紀初頭のフランスの首相エミール・コンブ (Émile Combes) を対象にしたものがある (図1<sup>①</sup>)。カトリックの修道士や修道女の追いつてられた姿が描かれているのは、共和政府の政教分離政策として、コンブが一九〇四年にカトリック修道会系の私立学校の閉鎖という強硬的な措置を実施したことを扱ったものであるからである。作中、コンブ (左側手前) はカトリックの僧服 (スータン) を着用した姿で描かれているが、これは、「獅子身中の虫」というキャプションにある通り、彼が神学校で学んで一時は聖職者を志した人物でありながら、後に教会から離れて

反教権的な立場に立つ政治家になったことを示唆している<sup>②</sup>。

この諷刺画は、ビゴーがフランスの共和政府による世俗化政策に関心を抱いていたことを示すものであるが、彼がすでに明治時代の日本に滞在中、同国人のカトリック宣教師や修道士を諷刺の対象にしていた作品を発表していたことは、一般には殆んど知られていないのではないだろうか。研究者の間でもビゴーの反教権的諷刺画は関心を集めてきたとは言いがたく、フランス人研究者のエレーヌ・コルヌヴァンがその存在を指摘しているのが目立つ程度である<sup>③</sup>。本論は、明治日本で刊行されたビゴーの反教権的諷刺画の考察が、ビゴーその人の理解においても、彼の属していた在日フランス人社会の動向の把握においても、また、カトリック教会史研究においても、重要な意味をもつものであると考え、これらの作品の製作動機、内容、受容状況などを明らかにすることを目的としている。



Le „Combes” de l'Ingratitude ; On n'est jamais trahi que par les siens !

図1 追放される修道士たちを眺めるエミール・コンブ

ある。もともと、ビゴは明治期の在日フランス人の中で最初に同国人のカトリック宣教師を攻撃した人物であったわけではなく、すでに彼の来日前、横浜外国人居留地のフランス語新聞は宣教師に対して活発に批判を行っていた。ビゴの反教権的諷刺画も、彼個人の意見の表明であったと同時に、在日フランス人の間に存在していた反聖職者感情を代弁するという性格をもっていたのである。

十九世紀末、在日フランス人の全てが、同国人の宣教師に対して

パリ・コミューン弾圧後に成立した第三共和政下のフランスでは、カトリック教会を攻撃する諷刺画が盛んに製作されていたが、ビゴの諷刺画は、本国から遠く離れた日本のフランス人社会でも、共和主義者によるカトリックへの批判が同時代に行われていたことを示すもので

批判的であったわけではない。フランス第三共和政において、反教権主義の立場に立つ有力な共和派政治家であったレオン・ガンベッタ (Léon Gambetta) は「反教権主義は、輸出項目ではない」という著名な言葉を残しているが、当時のフランスの共和派政治家や外交関係者は、本国内の政教関係の緊張を別に、国外ではカトリック教会と協力関係を取ることを厭わなかった。フランスの在日公使館も、日本で活動するフランスの宣教会や修道会と協調的な関係を結んでいる。

しかし、このようなフランス本国の共和派政治家の意向とは別に、国外のフランス人共同体において、カトリック教会への反感が存在しなかったわけではなかった。それ故に、フランス国外におけるフランス人共同体とカトリック教会の関係は、フランス本国のそれとは異なつた多様な形態をとっている。<sup>(4)</sup> 日本では、十九世紀末の在日フランス人の反教権的批判は、フランス人宣教師を重用するフランス公使館にも及んでいた。

現在に至るまで、在日フランス人の反教権主義は日仏関係史やカトリック教会史の分野で研究対象として取り上げられることはなかった。しかし、十九世紀末、新聞や諷刺雑誌を通して繰り広げられた彼らの活動は、公使館やカトリック宣教師など当時の様々な人々を巻き込んだものであり、在日フランス人社会の歴史上、看過することのできない重要な出来事であったと考える。本論は、各種資料

を用いて、在日フランス人の反教権主義的動向を具体的に明らかにし、ビゴーの諷刺活動をその動きの中で捉えることを試みた。

本論は、第一章で、一八八〇年前後、横浜のフランス語新聞により同国人のカトリック宣教師への批判が行われていたことに着目し、この時期、フランス人共同体の中の反教権的感情が表面化していたことを論じる。第二章では、ビゴーの諷刺雑誌『トバエ』に掲載されたマリア会の諷刺画を取り上げ、その作品が攻撃対象であったマリア会をはじめ関係者の注目を集めていたことを明らかにする。第三章で、仏領インドシナ植民地のフランス語新聞で、フランス駐日公使館と外交通訳官を務めていたフェリクス・エヴラール神父を批判する通信文が掲載されたことを取り上げ、続けてこの攻撃と連動する形で発表されたビゴーの諷刺雑誌『ル・ポタン』における反教権的諷刺画を考察する。

一、一八八〇年前後の在日フランス人社会における反教権主義  
江戸幕府による禁教政策によって途絶えた日本におけるカトリック宣教は、幕末に來日したパリ外国宣教会 (*A Société des Missions Étrangères de Paris*) によって再開されることになった。同会は、十七世紀中葉、パリで設立され、フランス語を母国語とする男子の在俗司祭から構成されていた宣教会である。一八七三年に長崎浦上のカトリック信徒に対する弾圧が終わりを告げると、パリ外国宣教会

の宣教師は日本各地で布教を開始していった。彼らは、慈善や教育事業活動を発展させるため、フランスから男女の修道会を日本に呼び寄せ、男子の修道会ではマリア会が一八八七年末に來日している。このようにフランス系聖職者によるカトリック宣教の独占状況は、二十世紀初頭にフランス以外の国々からドミニコ会やイエズス会などが來日して活動を開始する時期まで続いたために、近代日本のカトリック教会は、大変フランス色の強いものとなった<sup>⑤</sup>。

パリ外国宣教会の宣教師は、司牧や宣教の傍ら、各地の教会や学校でフランス語の授業を行うこともあり、日本におけるフランス文化の普及者としての一面をもっていた<sup>⑦</sup>。彼らは、フランス人であると同時にカトリック宣教師であるという二重のアイデンティティをもっていたわけであるが、この二重性のため、反聖職者感情をもつフランス人からは、フランス人としての愛国心が欠如した人間として反感を向けられることもあった。

確認できる限り、在日フランス人の中から反教権主義批判がカトリック宣教師に向けられた最初の例は、一八七九年六月に創刊された横浜のフランス語新聞『クーリエ・デュ・ジャポン』 *Le Courrier du Japon* (『日本通信』。以下、本章では『クーリエ』と略) で展開された宣教師批判の記事である。この『クーリエ』は、一八七〇年に創刊された日本初のフランス語新聞『エコー・デュ・ジャポン』 *Echo du Japon* (『日本の声』。以下、本章では『エコー』と略) の編集

部から独立して刊行された新聞である。『クーリエ』を創設したオーギュスト・アルマン (August Harmand) が『エコ』の編集方針に大きな不満を感じていたことは間違いない、その分裂の経緯からして、両紙は当初から対立関係にあり、紙面上で常に相手を攻撃しあっていた。一八八〇年当時、横浜のフランス人住者は約百名ほどであり、澤護氏は、両紙の発行部数はそれぞれ百部にも満たなかったのではないかと推測している。<sup>9)</sup> 両紙の間の中傷・誹謗の合戦は同時代者によく知られており、イギリス人画家チャールズ・ワグマン (Charles Wirgman) の『ジャパン・パンチ』*The Japan Punch*でも度々取り上げられていた。<sup>10)</sup> 当時、日本に旅行したフランス人も横浜のホテルでこれらの新聞を目にする機会があったようであり、旅行記で言及されていることも多い。<sup>11)</sup>

『クーリエ』はほとんど現存していないため、紙面内容を精細に調査することはできないが、『エコ』が折にふれて『クーリエ』に掲載された記事に言及して批判を加えているので、同紙の主張のおおよそを把握することは可能である。以下、『エコ』や各種の同時代資料を用いて、『クーリエ』の反教権的主張の内容を明らかにしていこう。

『クーリエ』は、創刊して間もない時期に、カトリック宣教師に対する批判を開始したようである。一八七九年十二月、北日本代牧区の副代牧フェリクス・ミドン (Felix Midon) は、『クーリエ』の編

集部に抗議の書簡を送っているが、その冒頭で、ミドンは、フランス宣教師に対する同紙の度々の非難に対して長らく放置してきたが、もはや見逃すことができないと判断し、抗議に踏み切ったと断っている。このミドンの書簡によると、『クーリエ』の批判は、パリ外国宣教会のフランス人宣教師の愛国心の欠如に向けられており、彼ら宣教師に対して、「聖職者であることを少し抑えて、より以上にフランス人であること」を求めたものであった。具体的には、『クーリエ』は、宣教師がフランス語教育に熱心に従事しないことを遺憾としていたらしい。ミドンは、『クーリエ』の編集部が宣教師の使命を誤解して、語学教育に十分従事しないことをもって批判することを不当とし、同紙が愛国者としての資格を独占することに異議を唱えている。<sup>12)</sup>

『エコ』が、このミドンの『クーリエ』に対する反論を是としていたことは、同紙に彼の抗議の書簡を転載して、好意的なコメントを付していたことから明らかである。また、『エコ』には、このミドンの主張に賛意を示し、普仏戦争後、同宣教会のジャン＝マリ・マラン<sup>13)</sup> (Jean-Marie Marin) とマルク・マリ・ド・ロ<sup>14)</sup> (Marc Marie de Ros) の両神父が祖国の敗北に涙を流したことを紹介して、彼らが愛国者であることを指摘する投書が掲載されている。<sup>15)</sup> 『エコ』の経営者は、創業初期からカトリック教会に好意的であり、同社からは、一八七四年にエヴラールの日本語入門書が刊行され、一八八



○年にはマランの北日本旅行記<sup>(18)</sup>、一八八一年と翌年に朝鮮のパリ外国宣教会の宣教師の執筆した仏韓辞典と文法書など宣教師の様々な仏文の著書が出版されている。

『クーリエ』が宣教師に対する批判を試みた理由の一つは、『エコ』と差別化をはかるため、同紙のカトリック教会寄りの姿勢とは異なった編集方針を打ち出す必要に迫られていたためであろう。『クーリエ』は、カトリック教会に好意的な『エコ』の姿勢それ自体を非難することもあり、東京の大火による被災者の救援のため、エヴラール神父が寄付金を募った広告を『エコ』に掲載した時、これを揶揄するような記事を書いていたようである。<sup>(20)</sup>このような『クーリエ』の対応を考えると、同紙がカトリック宣教師に対してフランス語教育への一層の従事を求めたのも、宣教師に対して好意的な立場から行われた提言というよりも、彼らを非愛国者として読者に印象づける底意があって行われたものではないかとも考えられる。

『クーリエ』の宣教師批判が高潮したのは、一八八〇年八月、マラン神父が横浜の教会の説教でフランス政府を非難する発言を行ったという理由で、彼を批判する一連のキャンペーンを実施した時である。<sup>(21)</sup>この時、『クーリエ』は、マランを横浜から放逐するために、読者にその旨を記した請願書を横浜のフランス領事館に提出するよう呼び掛けていた。一方、『エコ』は、マランを非愛国者と決め

つける『クーリエ』の論調に対して、マランを擁護し、その批判が根拠のないものであることを強調している。<sup>(22)</sup>フランスの横浜領事ジュール・ジュスラン (Jules Jouslain) は、両者の争いの過熱により、フランス人共同体が分裂することを懸念していた。<sup>(23)</sup>宣教会のマランの上長らは、彼の無辜を信じていたが、最終的に横浜の教会の司祭職から彼を外して転任させることを余儀なくされた。<sup>(24)</sup>この「マラン事件 L'affaire Marin」と呼ばれる騒動の翌年、マランはフランスに帰国しているが、それはこの『クーリエ』による一連の攻撃とは無縁でなかったであろう。このようにフランス人宣教師が同国人から新聞紙上で盛んに批判を受けたことは、約四十年後、宣教雑誌に掲載された在日宣教師の手になる記事にも触れられており、この事件が、日本の教会で先達の神父が理不尽な非難を浴びた出来事として長らく記憶され続けていたことが理解できる。<sup>(25)</sup>

『エコ』と『クーリエ』は、宣教師に対する評価を含めて様々な面に亘って対立していたが、当時の在日フランス人共同体の規模がそれほど大きくなかったことを考えると、それぞれの紙面構成は限られた読者層の反応を強く意識するものであったはずであり、両紙の論調には、在日フランス人社会の内部に存在していた構成員の政治・社会観の対立関係が相当反映されていたのではないかと考えられる。一八八〇年代初頭、横浜フランス領事館の副領事を務めていたルイ・バステード (Louis Bastide) は、『エコ』の共同経営

者の一人であったステファンヌ・サラベル (Stéphane Sarabell) と懇意にしていた人物であったが、両フランス語新聞の特徴を評して、それぞれ共和派の立場に立つ新聞であるが、『クーリエ』は、リベラリズムに傾斜しすぎていると述べている。<sup>(26)</sup> この彼の評価は、敷衍してみれば、『エコ』が保守的な穏健共和派の立場を代表したものであるのに対し、後発紙の『クーリエ』が『エコ』に対して急進的共和主義の立場から主張を行い、同様の政治思想をもつ在日フランス人の支持を調達しようとしたことを指摘したものといえる。

ただ、当時の横浜在住のフランス人は、『エコ』派と『クーリエ』派の間で二極化されていたわけではなく、この両者の誹謗合戦に嫌悪を感じていたものも存在していた。あるフランス人は、『エコ』への投書で、両紙の対立をフランス人として遺憾に思うと書いているが、興味深いのは、この投書者が自身の中立性を表明するにあたって、「自分は、イエズス会士 (jésuite) でも、コミュニナール (communard) でもない」とその独立の立場を強調していることである。<sup>(27)</sup> この文章において、『イエズス会士』が、カトリック教会に好意的な『エコ』とその支持者を指し、「コミュニナール」が教会に対して反感をもっていた『クーリエ』とその読者をあらわしていることは疑いがない。後にもみるように (第三章)、ビゴは、『ル・ポタン』の諷刺画で、「コミュニナール」を登場させ、パリ外国宣教会の宣教師を「イエズス会士」に見立てて両者を対立させているが、

このような用例は、当時の在日フランス人の間で、「イエズス会士」と「コミュニナール」が、それぞれ親教会派と反教会派を意味する符牒として流通していたことを示している。また、「コミュニナール」の語が人物類型として用いられている事実は、当時の在日フランス人社会においてパリ・コミュニケーションの記憶が生々しく残っていたことを物語っている。<sup>(28)</sup>

『クーリエ』は、一八八二年、創刊から約三年の後に廃刊となり、反教権主義的主張の発表媒体は失われることになったが、この新聞の廃刊によって在日フランス人社会の間の反聖職者感情が消え去ったわけではない。次章で、『クーリエ』の廃刊した時期に来日したビゴが、一八八八年、彼の代表的な諷刺雑誌『トバエ』で行ったカトリック修道会に対する批判を考察することにしよう。

## 二、『トバエ』の諷刺画とマリア会

フランスにおけるジャポニスム熱の高まりを通して日本に関心を抱いたビゴが、日本絵画を学ぶために来日したのは、一八八二年、彼が二十二歳の時である。当初の予定に反して、彼の日本滞在は長期化していったが、その間に、彼が東京と横浜に在住する過去の『クーリエ』支持層とも親しくなる機会をもっていたことは十分考えられる。

ビゴの祖父は、シャンソニエのピエール・ジャン・ド・ベラン

ジェ (Pierre-Jean de Béranger) と友人であったが、この名高い共和派の民衆詩人は、その作品でイエズス会を攻撃し、反教権的な主張を謳った人物であった。<sup>(30)</sup> パリ・コミュニケーション時代、十歳前後の子供であったビゴーは、コミュニケーションに交わって、彼らをスケッチしていたといわれるが、これらの事実から考えて、ビゴーの生家は恐らく共和主義者の家系であり、彼は幼時から反教権的感情を養っていたものと思われる。

確認出来る限り、ビゴーが行った最初のカトリック聖職者に対する批判は、『トバエ Tobaé』第二期、第四一号 (一八八八年十月十五日) に掲載されたマリア会 La Société de Marie の修道士を標的にした二枚の諷刺画である。<sup>(32)</sup> マリア会は、一八一七年にボルドーで設立された教育系修道会であるが、同会は日本におけるカトリック教育事業の発展の必要性を認めていたバリ外国宣教会の依頼に応えて会員の派遣を決定し、最初に一八八七年末から翌年初頭にかけて五名の修道士 (フランス人四名、アメリカ人一名) が日本に到着した。<sup>(33)</sup> このビゴーの諷刺画が発行された時期は、マリア会の修道士が来日して一年にも満たない同会の活動の草創期にあたり、東京に設立された暁星学校が日本政府の認可を受けてまもない頃であった。<sup>(34)</sup>

なお、ビゴーは、『トバエ』と『ル・ボタン』の両方で、マリア会を取り上げる際、常に「マリスト Mariste」の語を用いている。La Société de Marie という名前をもつカトリック修道会には、上記

のボルドーで設立されたものとは別に、一八一六年にリヨンに設立された男子修道会 (日本では「マリスト会」と呼ばれ、一九五一年に来日した) が存在する。一般にはこの同名の両修道会を区別するため、マリスト会の修道士には「マリスト Mariste」の語が、マリア会の修道士には「マリアニスト Marianiste」の語が用いられている。ただ、マリア会の修道士に対しても、「マリスト Mariste」の語が使われることがあるので、厳密に二つの語が使い分けられているわけではない。マリア会の修道士を指して「マリスト Mariste」と呼ぶ用例は当時にもみられること、<sup>(35)</sup> また、教会関係者の間でも両修道会が時に混同されることのあることを考えれば、ビゴーが諷刺的意図とは無縁に、マリア会の修道士を指して、「マリスト Mariste」の語を用いていたと考える間違いはないだろう。以下、両修道会の混同をさけるために、ビゴーが「マリスト Mariste」の語を使用していたときでも、我々は「マリア会」を批判したものと考えて訳していく。

『トバエ』に掲載されたマリア会の諷刺画の一枚目は、「現代日本 (カラス)」 「Le Japon moderne (Les Corbeaux)」 及び「マリア会主義の到来」 「Arrivée du Marisme」という題をもつ画である (図二)。<sup>(36)</sup> 一群のカラスとともに、十字架を持った聖職者たちが日本に飛んでくる姿が描かれている。タイトルに「カラス」とあるように、マリア会の修道士はカラスに擬せられている。カラスは、その黒色の容姿が



図2 マリア会の来日

黒衣の僧服を連想させ、鳴き声がフランス語の十字架「Croix（クロワ）」の発音に近似しているので、カトリックの聖職者を寓意する動物として、フランスの諷刺作品でよく使われていた。<sup>(37)</sup> また、このビゴアの諷刺画では、マリア会士が太陽の「光」（Lumière＝啓蒙）を遮るように描かれているが、このような構図は、「進歩」を阻害するカトリック教会の反動性を強調しようとする反教権的諷刺画で好んで用いられたものである。<sup>(38)</sup>

マリア会に対する二枚目の諷刺画は、「日本のマリア会士（アリアンス・フランセーズにて）」（図3）という題の画である。作中では、マリア会士が彼らの学校で日本の男女の子供たちを前に教えている。現実の暁星学校は男子校であり、当時はまだ夜間部に語学を学びに

くる生徒の方が多かったのが実情であったが、この諷刺画では日本人の男女の子供が教室で学んでいる。この子供たちが善良な幼子に描かれているのは、マリア会修道士の悪辣さと対比させようとする意図がビゴーにあったからであろう。

フランス語のキャプションと日本語のキャプションは、下記の通りである。後者は、日本人協力者の手になったものと考えられる。

フランス語キャプション

Ecole Française — Ici on enseigne l'Allemand et l'Anglais.

Et l'alliance française qui se réjouissait déjà

il ne manque plus que d'accorder une subvention et cela sera complet.

Il ne faut pas désespérer. (Ce que les allemands et les anglais doivent

rire)

「フランス学校 ……ここではドイツ語と英語を教える。

それで喜んでいるアリアンス・フランセーズもいい面の皮だ。

あとは助成金を交付するばかり、そうならば言うことなしだ（全く情けない）。だが絶望してはならない（ドイツ人やイギリス

人がどんなに笑っていることだろう）」（芳賀徹他編『ビゴー素描コレクション』：明治の世相』第二巻、岩波書店、一九八九年、八七頁



図3 マリア会の教育

の訳文による)

日本語キャプション

「甲 子供等がみんな独逸や英吉利ばかり稽古するやうに成  
あたら堂しよ ほんとにそをなりやすまない柵へ

乙 どこへ

甲 マリスト商会えさ」

この諷刺画の主題に関して、清水勲氏は、「フランス語の凋落、

ドイツ語・英語の隆盛の象徴的様相を描く」と解説している。<sup>39)</sup> ビゴ

ーが日本におけるフランス語教育の現状に関してこのような危機感  
を抱いていたことは清水氏の指摘通りであるが、この諷刺画の解釈

としては、日本の外国語教育に関する「象徴的様相」を描いた作品  
とみるよりも、マリア会の教育事業に向けて直接的な批判を試みた

作品として捉えるべきであろう。英語やドイツ語を教えるようなフ

ランス系カトリック修道会の学校に、アリアンス・フランセーズが  
補助金を与えるのは馬鹿げているというのが、ビゴーの主張であつ

たと考えられる。

アリアンス・フランセーズは、一八八三年、フランス国外におけ

るフランス語とフランス文化の普及を目的にしてパリで創設された  
団体である。<sup>40)</sup> 同団体の会報によると、ビゴーは一八八六年に日本支

部に加入しているが、この事実はビゴーが日本におけるフランス語  
教育の発展に強い関心を抱いていたことを示している。<sup>41)</sup> 彼は、一八

八五年と八六年に中江兆民が主宰した仏学塾でフランス語教師を務  
めており、この仕事を通じてフランス語教育の現状に関心を寄せる

ようになったと想像されるが、また彼のアリアンス・フランセーズ  
の入会には、日本においてフランスの影響力を向上させるといふ愛

国心的動機とも関わっていたことは間違いない。



ただ、アリアンス・フランセーズは、非宗教的な組織であったが、海外におけるカトリック宣教師や修道女たちによるフランス語教育を高く評価していた。日本に関しても例外ではなく、同会の会報では、マリア会や女子修道会のフランス語教育活動を評価する記事が多数掲載されている。<sup>(42)</sup> また、マリア会の初代日本管区長で暁星学校の初代校長になるアルフォンス・ヘンリック (Alphonse Heinrich) は、すでに来日前、日本支部の委員になることを推薦されていた。<sup>(43)</sup> ビゴーは、会員であっただけに、アリアンス・フランセーズがカトリック修道会に好意的な姿勢を取ることに關しては、裏切られた気持ちになったとしてもおかしくはない。

『トバエ』に掲載されたマリア会に対する諷刺画は、刊行時、諷刺の対象となった同会の注意を引いていた。一八八八年十一月三日、ヘンリックは、マリア会本部に宛てた手紙で、次のように書いている。<sup>(44)</sup>

「東京に住むあるフランス人諷刺画家が、我々のことを諷刺画に描きました。この人物は、革命派 (un rouge) で、愛国者——彼なりの流儀にはありますが——です。(中略) もし、この雑誌が手に入りましたら、あなたのもとに送りましょう。フランス公使は、外国人公使の方々と皇帝 (empereur) にいたるまで、あらゆる真面目で尊敬すべき人物にまで攻撃を加える

この諷刺画家に対して大変ご立腹です。もし彼がこれ以上フランスやフランス人の事業に対して攻撃を続けるなら、さまざまな次のフランス本国行きに船に放り込まれて送還されることになるでしょう。彼は、我々を諷刺画に採り上げることによって貢献してくれました。というのも、彼は、我々を日本の大臣や諸外国の公使達と同じ陣営に含めてくれたのですから。それは、ばかにすべきことではありません。彼は、日本人の間にフランス語の学校でドイツ語や英語も学べることを知らしめてくれました。このことは、当初なかなかよく理解してもらえないことでした」

この文面から、ヘンリックが同国人からの思いがけない諷刺攻撃に反発を覚えながらも、作者を札付きの人物とみなして、彼の諷刺画を受け流そうとする態度がうかがえる。この手紙の送付時、彼は諷刺画を所持していなかったように思われるが、内容を詳しく描写しているのも、それ以前に作品を目にする機会があったのであろう。ただ、ビゴーの諷刺画(図2)に関して、彼は、帽子を被ったマリア会士が描かれているという誤った説明を行っていたり、表題に關して「カラスの侵攻 invasion des corbeaux」と間違えて紹介していることが確認できる。このような細部の誤りは、手紙の落ち着いた筆致にもかかわらず、この絵を見たときに彼が心穏やかではいられ

なかったことを示しているように思われる。

また、このヘンリックの手紙は、当時のフランス駐日公使ジョセフ・アダム・シエンキヴィッチ (Joseph Adam Sienkiewicz) が、ビゴーの諷刺活動に対して不快感を覚えていたことを伝えている。シエンキヴィッチは、カトリック教会に大変好意的であり、<sup>(45)</sup> マリア会の来日に対しても積極的に協力し、同会の教育活動が日本でフランス語やフランス文化の普及に貢献することを期待していた人物であった。<sup>(46)</sup> 恐らく、彼自身も、『トバエ』<sup>(47)</sup> でしばしば諷刺に取り上げられていたため、心中、ビゴーの存在を不愉快に感じていたのである。<sup>(48)</sup> なお、シエンキヴィッチは、一八九一年九月に書かれた本省宛の外交報告で、暁星学校に対する偏見に満ちた敵意から、同校においてドイツ語がフランス語と同等の地位で教えられていると非難するものがある<sup>(49)</sup> と記しているが、恐らくこの時、彼はビゴーのことを念頭に置いていたのではないかと思われる。<sup>(48)</sup>

このビゴーの諷刺画は、刊行後も教会関係者の間で忘れ去られることはなかった。暁星学校の設立から二十周年を迎えた一九〇八年、フランス在住の二人の教会人が日本におけるマリア会の教育活動の成果に祝意を表するなか、ビゴーの諷刺画に言及しているのが確認できる。一つは、マリア会のピエール・ルボン (Pierre Lebon) がパリの日仏協会 (Société franco-japonaise de Paris) で行った講演であり、<sup>(49)</sup> もう一方は、パリ外国宣教会員のピエール・コンパニオン (Pierre

Compagnon) が『パリ外国宣教会年報』*Annales des Missions Étrangères de Paris* に発表した論考である。<sup>(50)</sup> それぞれ日本におけるマリア会の教育事業の発展を来日当初に遡って論じるなか、同会の活動初期における思わぬ妨害者としてビゴーに触れている。ともに同年に発表されたものとはいえ、両者がビゴーの諷刺画に関して述べた内容は異なっている。一方が他方をそのまま参考にしたものとは考えられず、二人がマリア会の活動に関して論じた際に、それぞれ独立してビゴーの作品に言及したものと考えられる。

ルボンもコンパニオンともにビゴーの名前を挙げておらず、日本在住のフランス人諷刺画家という表現に留めているが、その扱いに彼らのビゴーへの蔑視をみてとることができよう。ただ、ビゴーの諷刺画の発表から二十年の歳月を経ていることもあり、二人とも諷刺画に関して正確さを欠いた紹介をしている。ルボンは、ヘンリックと同様、ビゴーの諷刺画 (図3) を通して、日本人は暁星学校がフランス語のみを教える学校ではないということを知ることができたと皮肉交じりに指摘しているが、もう一枚の諷刺画 (図2) の説明において、表題を「マリア会主義の侵入 (Invasion)」(傍点、引用者) と誤って紹介している。また、コンパニオンの方は、諷刺画の掲載紙の名前を誤って『ル・ボタン』と紹介している。後述 (第三章) するように、この『ル・ボタン』は、パリ外国宣教会の宣教師フェリクス・エヴラル神父に対するビゴーの諷刺画が掲載され

た雑誌であり、コンパニオンは、恐らくこの雑誌の印象が強かったため、ビゴアのマリア会に対する諷刺画に言及する際、この雑誌の名を挙げてしまったのではないかと考えられる。

このマリア会に対するビゴアの諷刺画は、さらに刊行後、半世紀を過ぎた時期にも言及されていることが確認できる。『日仏協会会報』の編集者であったエドゥアル・クラヴェリー (Edouard Clavery) は、一九四〇年に刊行された極東問題に関する彼の著作で、作家クロード・ファレール (Claude Farrere) の来日と暁星学校への訪問に触れ、その箇所ではビゴアの同校に対する諷刺画を紹介している。彼は、ヘンリックやルボンと同様に、ビゴアの作品 (図3) が、その意に反して、暁星学校の語学教育の宣伝になったのではないかと指摘している<sup>51</sup>。ただ、クラヴェリーもこの諷刺画に関して正確な紹介を行っておらず、作中に「English spoken, man spricht deutsch (当校では) 英語、ドイツ語を話します」という記載があるというように、誤って説明している点が見受けられる。

クラヴェリーは、編集者として『日仏協会会報』に掲載された過去のルボンの論に目を通していたことは疑えないが、彼はまた日本の版面に深い関心をもつ人物であったので、ビゴアの作品を過去に直接観る機会があったのであろう<sup>52</sup>。教会関係者たちが、ビゴアに言及する時、彼の実名を伏せていたのに対し、クラヴェリーはビゴアの名前を挙げており、彼を才能ある画家と書いている。

以上に見てきたごとく、マリア会に対するビゴアの諷刺は、暁星学校の草創期の一挿話として、一部のフランス人の間で後々に至るまで記憶に残り続けていた。作品の言及において細かい誤りが認められるのは、時の経過によって記憶が変容していたためであろうが、ビゴアの諷刺のメッセージは、イメージとして忠実に読み手に伝わっていたことが確認できる。活字上の諷刺ならこのように長期に亘って記憶に留められることは難しかったであろうことを考えると、視覚的手段を用いた彼の諷刺は、読み手に強い印象を与えることにおいて、十分成功していたといえるであろう。

もっとも、この事実は彼の諷刺画が読み手に対して説得力をもちえていたかどうかとは別の問題である。ビゴアの批判はマリア会の教育活動がフランスの国益に反しているというナショナリズムの観点から行われていたが、暁星学校のフランス語教育が戦前の日本でフランス文化の普及に果たした功績を考えると、このような批判は的はずれなものであったというほかはない。ただ、ビゴアがマリア会の教育事業が始まった当初に批判を加えていたことは、同校の教育がもたらした実際の成果を確認する以前に、彼が諷刺を実行したことを意味している。恐らく、その諷刺画の製作は、マリア会の来日を機に、彼のカトリック教会への旧来の反感を呼び起こされた結果、行われたものと考えることができるであろう。事実、ビゴアの反教権的批判はこの一作にとどまらず、その約四年後に刊行された

『ル・ポタン』においてさらに強烈な形で発せられることになる。

### 三、『ル・ポタン』のエヴラール神父批判

『クーリエ・デュ・ジャポン』で行われたカトリック宣教師批判から約十年後の一八九〇年代初頭、仏領インドシナのフランス語新聞の紙上には、在日フランス人宣教師を批判する匿名の通信文が頻繁に掲載されていた。これらの記事で主要な批判対象になったのが、パリ外国宣教会のフェリクス・エヴラール神父 (Félix Evraud, 1844-1919) である。ビゴーは、仏領インドシナの新聞によるこれらの批判記事と連動する形で、一八九二年の初夏から年末にかけて、彼の諷刺雑誌『ル・ポタン』<sup>(53)</sup>において、エヴラールを標的とする諷刺画の連作を発表している。

エヴラールが在日フランス人の一部から敵視されたのは、カトリック神父でありながら、共和国フランスの外交に深く関わることが可能な通訳という職務に就いていたことが、彼らの疑惑を招いたためである。パリ外国宣教会の宣教師には、その優れた現地語の知識を生かして、極東のフランス外交に関わった人物がいるが、幕末のフランスの対日外交に深く関わったウージェヌ・エマニエル・メルメ・カシヨン (Eugène-Emmanuel Mermet-Cachon) もその一人であった。イギリス人画家チャールズ・ワグマンは、『ジャパン・パンチ』<sup>(54)</sup>でメルメ・カシヨンを諷刺の対象にしているが、諷刺

画で取り上げられた当時、彼はすでにパリ外国宣教会を退会して宣教事業から離れており、ワグマンは、フランス人外交団の一員としての彼に関心があったにすぎなかった。それに対し、エヴラールに対するビゴーの諷刺は、その対象がカトリック教会の関係者であることと切り離しえなかった。

本章では、まず、一八九〇年代初頭、横浜の反教権主義者の憎悪の対象になったエヴラールの人物像を明らかにし、次に、仏領インドシナのフランス語新聞『アンデパンダンス・トンキノワーズ』 (Independance Tonkinoise (『トンキンの自立』)) と『クーリエ・ダイフォン』 (Courrier d'Haiphong (『ハイフォン通信』)) に掲載された通信文によるエヴラール批判を取り上げる。続いて、反教権主義者の活動に対するフランス公使館の対応を取り上げ、最後に『ル・ポタン』の諷刺画の考察を試みる。

#### 1 フェリクス・エヴラールと近代日本

フェリクス・エヴラールは、一八六七年、幕末の動乱期に來日したカトリック宣教師の一人である (図4)。一八四四年、フランスのメッス司教区内のラ・マクスに生まれ、一八六四年にパリ外国宣教会に入会した。現在ではほぼ忘れられた人物であり、彼を扱った伝記類も存在しないが<sup>(55)</sup>、もし一般にその名が知られているとしたら、原敬がカトリック信者であった青年時代、フランス語を学ぶた



図4 フェリクス・エヴラル

めに学僕として仕えた神父としてであろう。<sup>(56)</sup>キリスト教の禁制時代に活動を開始したエヴラルは、一九一九年に横浜で没するまで、日本のカトリック宣教に生涯を捧げた人物であった。教会では周囲の信望を集めた有能な神父であり、一九〇八年に、東京大司教区の副司教という要職に就いている。

カトリック雑誌『声』は、一九四一年十一月（第七八九号）に、「フェリックス・エヴラル師の追憶」という小特集を組んでいるが、ここに集められた信者の回想からうかがえるのは、きわめて質素な生活を送り、自己を厳しく律する高德の神父の像である。パリ外国宣教会本部の神学校で、エヴラルと同窓であったエメ・ヴィリオン（Aimé Villon）神父は、その自伝で、自分が精神的な苦境に陥ってフランスに帰ることを考えた時、エヴラルが親身になって励ま

してくれたおかげで、帰国を思いとどまったことを語っている。<sup>(57)</sup>管見の限り、カトリック教会の関連文献で、エヴラルを批判的に言及しているものはみあたらない。<sup>(58)</sup>

エヴラルの人物像を知る参考に、教会関係者以外による証言を二つ取り上げてみよう。一八七四年、新潟までの旅行中にエヴラルと同道したフランス人医師ジャン・ヴィダル（Jean Vidal）は、彼を日本語能力に富んだ「気品のある神父」で、「超人的な仕事」をこなす人物であると賞賛している。<sup>(59)</sup>また、時代は下るが、カトリック宣教師と交際のあったドイツ人医師のエルヴィン・フォン・ベルツ（Erwin von Bartz）は、日記（一九〇四年一月十八日）で、エヴラルに関して、「彼が事実、いかに目的のためには手段を選ばないかを見ると、個人としては自分も好感が持てない。だがしかし、かれが自己の使命に身を捧げる忘我的態度には、全くの感嘆のほかはない」と評している箇所がある。<sup>(60)</sup>ヴィダルからは日本語に堪能で、知力と実行力を兼ね備えた人物として評価を受けているエヴラルであるが、このベルツの評言からは、傍から彼が強引な性格の人物にみられることもあったことがうかがえる。

エヴラルは、在日外国人の中で知識人として認められていた人物であった。イギリス人のジャパノロジストとも親しく、バシル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain）は、『日本事物誌』*Things Japanese*（初版、一八九〇年）の序文で、「キリスト教宣教」



の項目の原稿を引き受けた彼に謝辞を述べている。<sup>(61)</sup> また、アーネスト・サトウ (Ernest Mason Satow) は、在日英国公使時代 (一八九五―一九〇〇年)、エヴラールと親交があり、キリシタン時代の研究に關して彼に度々助言を仰いでいる。<sup>(62)</sup>

また、エヴラールは、時事・社会問題に通じた外国人として、日本の新聞社などから、折に触れて意見や感想 (内地雜居問題や韓国併合、教皇庁に關わる外交問題<sup>(65)</sup>、明治天皇の崩御など) を求められていた。エヴラールの出版物としては、横浜の「エコー・デュ・ジャポン」社から、日本語学習の手引き書を出版しているほか、明治時代の欧文絵本の「ちりめん本」で、昔話『桃太郎』のフランス語訳を担当している。<sup>(68)</sup>

エヴラールがこのような幅広い人間關係に恵まれていたのは、彼が、一八七五年から一八九三年まで、司牧活動のかたわらに在日フランス公使館で通訳官を務めていたことが大きかった。エヴラールが公使館で重用されたのは、彼の日本語能力が他の通訳官に比べて抜きんでていたこと、そして彼の人格が高く評価されたことによる。<sup>(69)</sup> シェンキヴィツ公使やヴィクトール・コラン・ド・プランシー代理公使は、エヴラールの長年に亘る真摯な働きに報いるため、レジオン・ドヌール勲章を授与させたいと願っていた。<sup>(70)</sup>

しかし、エヴラール個人は、公使館の通訳業務を好んでいたわけではなかった。その仕事は彼から司牧に費やす時間を大幅に奪うこ

とになったがためであり、神父と親しかった信者の回想によると、後年、彼は、「日本に来てから、二十年を無駄にした」ことを語っていたようである。<sup>(72)</sup> 通訳官としての出仕は、エヴラールに日本の法律に精通させることになり、また、彼に各界の有力者との人脈を作る機会を与えるなどカトリック教会に様々な益をもたらしたことも事実であるが、宣教会にとつては、フランス外交の補助業務にエヴラールをとられるよりも、彼を直接教会のために貢献させるほうがはるかに望ましかったのであろう。シェンキヴィツは、ピエール・マリ・オズーフ (Pierre Marie Osouf) 東京大司教がエヴラールを司祭職に専念させるために公使館の職務から外すことを彼に度々懇願していることを一八九一年七月の外交書簡で報告し、エヴラールが余人に代え難い人材であるだけに大司教の非協力的な対応を遺憾としている。<sup>(74)</sup> この点をみれば、当時の反教権主義者が批判したのとは別の意味で、エヴラールやオズーフには「愛国心」が欠けていたとみることもできるであろう。<sup>(75)</sup>

もつとも、このような内部事情は、当時、一般の在日フランス人の知られるところにはならず、エヴラールは反教権主義者からカトリック教会の影響力を伸張させるためにフランス公使館に居座り続けて、フランス外交を損なう元凶と思われるいたのである。次節で、在日の反教権主義者が、仏領インドシナのフランス語新聞を通して、エヴラールと公使館に対してどのような批判を行っていたのかを見

ることにしよう。

## 2 一八九〇年代初頭における在日フランス人の反教権主義

仏領インドシナのハノイで刊行されたフランス語新聞『アンデパンダンス・トンキノワーズ』には、「X」という署名のある匿名の通信文「日本からの手紙」(Lettre du Japon) が約三十数通、一八九一年九月から翌年七月までの間、不定期に掲載されている。このうちカトリック教会に触れたものが十五点ほど存在し、その大部分がフランス公使館の通訳であるエヴラルを批判するものであった。<sup>(76)</sup>

これらの通信文は、通訳官にすぎないエヴラルが実質的にフランスの外交官を支配している状態を批判し、在日公使館がフランスの国益に反する行動を取っている事態に警鐘を鳴らすものであった。

当時、フランスの在日公使館は、休暇中で本国に帰国していたシエンキヴィッチ公使に代わり、ヴィクトール・コラン・ド・ブランシー (Victor Collin de Plancy, 1853-1924 図5) が代理公使 (一八九一年十一月―一八九三年二月) として赴任中の時期であった。彼の父親のジャック・コラン・ド・プランシーは、『地獄の辞典』などの著作で知られる著述家であり、一八四一年にカトリックに改宗した後、多くの護教的な著作を執筆した人物である。<sup>(77)</sup> コラン・ド・プランシーが、イエズス会の経営するパリの聖母マリアの無原罪学園 (Ecole de l'Immaculée conception) で学んでいるのも、その家庭環境によるも

のであろう (この学校の通称は、同校の所在地である「ヴォジラール Vaugirard」である<sup>(78)</sup>)。同校を卒業後、彼はパリの東洋語学校 (Ecole spéciale des Langues orientales) に入学して中国語を学び、一八七七年に卒業後、外務省に通訳官として入省した。当初、北京や上海で外交業務に従事し、一八八七年、初代のフランス領事として朝鮮に赴任している。彼が、同地で、危難にあったパリ外国宣教会の宣教師に便宜を図っていることは、彼の極東におけるフランス人宣教師に対する好意を伝えるものである。<sup>(79)</sup>

日本に赴任中、日本語や日本の諸事情に十分通じない彼は、通訳官の力を借りなければ、業務を進めることが不可能であったと思われるので、エヴラルの助力に負うことが多かったことは想像に難くない。<sup>(80)</sup> 彼が、反教権主義者から、エヴラルの影響下にある人物と非難されることが多かったのも、一つには、彼がエヴラルを頼りにせざるをえない人物として周囲からみられていたからであろう。

コラン・ド・プランシーは、『アンデパンダンス・トンキノワーズ』に掲載された在日フランス公使館に対する批判を問題視して、一八九二年一月二十七日、八月二十二日、八月二十五日の三度に亘って、外交報告書を本国の外務大臣に送っている。<sup>(81)</sup> 彼は、「日本からの手紙」の匿名の筆者を横浜のゼネラル・ホスピタルの医師であるミシヨー博士 (ポール・ミシヨー Paul Michaut) と報告しているが、この推定をわれわれも正しいと考える。<sup>(82)</sup> ミシヨーは、現在のジャポ



図5 ヴィクトール・コラン・ド・ブランシー

ニスム研究において、エドモン・ド・ゴンクール (Edmond de Goncourt) に北斎に関する伝記的情報を提供し、『北斎・十八世紀の日本美術』*Hokusai : l'art japonais au XVIIIe siècle* (一八九六年) の成立に関わった人物として知られているが、この人物に関しては、依然不明なところが多い。<sup>(84)</sup> 現在、明らかにしえたところでは、彼は、一八六〇年にパリで生まれ、パリ大学の医学部で学んだ後、パリの病院でインターンを務めながら、一八九〇年に男性の神経症に関する研究で精神医学の学位を取得している。<sup>(85)</sup> その後、彼は、インドシナ植民地に赴いて、同地にいくらか滞在した後、来日したらしい。

ゴンクールは、『北斎』の序文に、彼に送られたミシヨの手紙を引用しているが、その手紙で、ミシヨは、ゴンクールが日本美術を紹介した著作

『芸術家の家』*La maison d'un artiste* から受けた感動が日本を訪問したいという憧れを抱かせたと語っている。<sup>(86)</sup> ミシヨは、相当知的関心の広い人

物であつたらしく、『アンデパンダンス・トンキノワーズ』の通信文では、日本の政治や、日本人の国民性、音楽、美術まで幅広い題材を論じている。<sup>(87)</sup> また、同時期にハイフォンで刊行された『クーリエ・ダイフォン』紙にも、『Vaccinasesen (わかりません)』という筆名で日本関連の通信文を送り、日本の古典演劇やアイヌ民族などについて語っている。<sup>(88)</sup>

ミシヨは、フランスに帰国後、折にふれてゴンクールの家を訪問しているが、ゴンクールの『日記』(一八九六年六月三日)によると、その時にビゴーのことを話題にすることもあつたらしい。<sup>(90)</sup> ミシヨは、ビゴーと同年の生まれであり、両者の共有する日本芸術への関心が、二人の間の交友を深めるきっかけになったことは十分考えられる。日本語にあまり通じなかったと思われるミシヨは、ビゴーから日本に関する情報を得ることも多かったであろう。

ミシヨが滞日中に通信文を送った『アンデパンダンス・トンキノワーズ』と『クーリエ・ダイフォン』は、当時のインドシナ植民地の代表的なフランス語新聞であつたが、両紙ともにフリーメーソンの会員が出版に関わっており、反教権的な主張が盛んに展開されていた。<sup>(91)</sup> 彼は、来日前にインドシナ植民地に滞在した間、これらの新聞の経営者と知り合う機会をもっていたのではないかと思われる。<sup>(92)</sup>

ミシヨの匿名通信文「日本からの手紙」でエヴラールに対する

批判が口火を切られたのは、『アンデパンダンス・トンキノワーズ』の一九一一年十二月十二日号である。横浜に一時滞在していた仏領インドシナのフランス人らが、十一月十日に行われる日本政府主催の観菊会に招待されると考えていたにもかかわらず、実際には参加できなかったため、フランス公使館の対応に抗議をしたことがあった。この事態に関して、ミショーは、教会のミサに出席しないフランス人達を冷遇するエヴラルの意向によって、彼らの参加が妨げられたのだと考えて批判を行ったのである。日本在住の通信員であった彼は、その立場を利用して、日本国外の多数のフランス人に、在日フランス公使館の陥っている嘆かわしい現状を知らしめようという意図があったのであろう。

これ以降、一九九二年七月頃まで、ミショーによるエヴラルとフランス公使館に対する批判は継続していくが、彼の主張の動機には、フランスの日本における影響力が英独と比較して目に見えて減退しているのにもかかわらず、公使館が何ら打開策を講じないままにいるという彼の愛国心から来た危機感と、公使館が居留地の在日フランス人に対して十分な保護をしていないという不満の二点が関わっていた。そして、彼は、日本におけるフランスのプレゼンスの低下にも、公使館の在日フランス人に対する冷ややかな対応にも、通訳官エヴラルの存在が大きく影響しているとみていた。

フランス公使館に直接尋ねたのかどうかかわからないが、ミショー

は、公使館がエヴラルの長年に及ぶ雇用を正当化する理由として、彼の日本語能力の高さを挙げるのが常であると書いている。これに対して、ミショーは、パリの東洋語学校で日本語を学んだ通訳官が既に輩出されている現在、エヴラルに替えて、彼らを積極的に登用すべきなのではないかと考えていた。しかし、それが今まで実現されることがなく、日本に赴任した通訳官が来日間もないうちに転出することになるのは、公使館における教会の影響力が失われることを恐れたエヴラルが、自分の地位を脅かす通訳官の追い出しを常に図っているからであると信じていた。ミショーは、イギリスの外交官が有力会員になっている「日本アジア協会 Asiatic Society of Japan」のような優れた日本研究団体が、フランス公使館の中から生み出されることがないことを遺憾としていたが、このようなフランスの日本研究の遅れも、エヴラルによる通訳職の独占が妨げになって、日本通の外交官が育たないことの結果であると彼には考えられた。<sup>(93)</sup>

現実には、一通訳官に過ぎないエヴラルにこのような権勢を持ち得ることが可能であるわけはなかったが、当時の在日フランス人の目に、彼がこのような悪漢として映りえたとすれば、それはカトリック教会のマイナス・イメージが、すでに来日前、彼らの中に強固に抱かれていたからとしか考えられない。注目に値するのは、ミショーがしばしばエヴラルを指して「イエズス会士」と呼んでいた

ることである。エヴラルの所属するパリ外国宣教会は一般に著名な組織ではなかったこともあり、同会の宣教師は、日本でイエズス会の宣教師とみなされることも多かった。<sup>(94)</sup>しかし、ミシヨーやビゴーが、エヴラルを「イエズス会士」と呼んで批判していた時、それは、彼らの無知からきたものというよりも、むしろ十九世紀フランスの反教権主義者の間で風靡していた「イエズス会神話（伝説）」の影響のもと、イエズス会の名を語っていたと考える方が適切であろう。この「イエズス会神話」とは、イエズス会士を目的のために手段を選ばない詭弁家とみなしたり、イエズス会を様々な謀略的手段を弄して、政治や社会に害をなす国際的な秘密結社とみなす、反イエズス会的な言説・思想をさすものである。<sup>(95)</sup>

ミシヨーが、コラン・ド・ブランシーをイエズス会系学校の出身者であることをあげつらっているのも、「イエズス会士」のエヴラルが公使館を支配しているという彼らの陰謀論的な理解のもとで批判が行われていたからであろう。『アンデパンダンス・トンキノワーズ』では、エヴラルは、しばしば共和国フランスの外交機密を盗むカトリック教会のスパイとして非難されている。

「東京の在日フランス公使館は、ここ十年来と同様、一人の宣教師の指導下にある外務省の反動家どもの巢窟であり続けることであろう。この宣教師は、本国の外務大臣が代理公使のみ

に許したと考えている外交上の秘密を知ることができる」（『日本からの手紙』『アンデパンダンス・トンキノワーズ』一八九二年二月十六日）

「宣教師は、全能の存在である。彼は金を握り、教育を手中に収めている。（中略）日本では、フランス人商人は、宣教師ほど執拗な敵を相手に持たない。宣教師はどこにでも侵入する、外交業務にまでも。現地語に通曉しているので、通訳官の服を纏っている。しかし、この神父が、役人の服装を着用した厭悪すべき存在であることは明白である。宣教師は、二つの方面から金を受け取る。共和国政府は通訳として彼に支給し、宣教師団はスパイとして彼に支給する」（同前、一八九二年四月九日）

『アンデパンダンス・トンキノワーズ』の匿名記事による攻撃が続いているさなか、エヴラルの外交通訳職の罷免を求める在日フランス人の請願書（二八九二年五月九日付）が本国の国民議会に向けて提出されている。<sup>(96)</sup>この請願の内容は、ミシヨーの匿名通信文で展開されていた批判と同趣旨のものであり、この請願運動の中心にミシヨーやビゴーがいたことは間違いない。当時、横浜と東京には彼らを中心とする反教権主義的なグループが存在し、ビゴーは、ミシヨーの通信文やこのグループの中で交わされた意見を参考にし



ながら、『ル・ポタン』の諷刺画を作成していったのであろう。

ビゴーは、『トバエ』の廃刊時（一八七九年十二月）、彼の諷刺画に取り上げられた人物から抗議が殺到していることを廃刊の理由に挙げていた。<sup>(97)</sup> 実際、マリア会に対する彼の諷刺画の事例から考えても、彼が読者から直接抗議を受けることがあったとしてもおかしくはない。ただ、ビゴーが『トバエ』の廃刊後にも外国人居留者を対象にした諷刺活動を続けることが可能であったのは、一方で彼の活動を支持する人々が少なからずいたからであろう。一八九一年の三月、『クーリエ・ダイフオン』は、横浜在住のあるフランス人の通信文（同年二月二十一日付）を掲載しているが、この匿名の筆者はビゴーの『ポタン・ド・ヨコ』*Potins de Yoko*の第五号が出版予定になっていることを紹介し、「トンキンに住むあなた方は、恐らく、『ポタン・ド・ヨコ』を御存じでしょう。フランス人のビゴーは、活気とユーモアに満ちたこの作品で、日本人やフランス人を才気煥発にからかい、諷刺をおこなっています。彼の空想の犠牲者（？）が第一に喜ぶ者であるのは、その冗談が善意のあるもので、決して良識の域を外れないからです」と好意的に語っている。<sup>(98)</sup> また、ミシヨールは、『アンデパンダンス・トンキノワーズ』の通信文で、エヴラールを批判した『ル・ポタン』（第二期、第二号）に触れ、ビゴーを「ユーモアと日本趣味に満ちた、才能ある芸術家」と紹介していた。<sup>(99)</sup>

一八八〇年前後の『クーリエ・デュ・ジャポン』の記事や一八九〇年代初頭の『アンデパンダンス・トンキノワーズ』に掲載された匿名通信文、また『ル・ポタン』のビゴーの諷刺画などは、十九世紀末の在日フランス人社会の間に反聖職者感情が潜在しており、折に触れて噴出することがあったことを示している。このような動向は、同時期のフランス本国における反教権主義の高まりと無縁でなかったことは明らかであるが、それでは、当時の在日フランス人社会において、このような反教権主義はどのような社会的基盤をもっていたのだろうか。

フランス人居留民に関する資料の不足から、実証主義的に十分な議論を進めていくことは難しいが、ミシヨールやビゴーの主張内容から判断する限り、カトリック教会に好意的な人々は、公使館員や大学教授などの居留民の中のエリート層であり、教会と対立している人々は、居留地の大部分を占める商人層や自由職業の人々が中心に含まれ、後者は前者に対して階級的な敵意を抱いていたとひとまず典型的に理解することができるかもしれない。少なくとも、反教権主義者は、後者の中に自分達の主張の共鳴者を獲得することを期待していたといえる。

ミシヨールやビゴーは、来日前からすでに反教権主義の信念の持ち主であったことは確かだと思われるが、反聖職者感情を抱いていた人々は一様ではなく、皆がイデオロギー次元で反教権主義を抱いて

いたわけではなかったであろう。事実、反教権主義者が、フランスの威信の維持やフランス人居留民の生活の保障といった現実的次元の問題に争点化して主張を展開していることは、当時の反教権主義が居留民の生活感情と結びついていた一面のあったことを示している。

もし、居留地に反教権主義が醸成される土壤があったとすれば、それは宣教師と居留民の間に心理的距離感の存在していたことが手伝っていたであろう。商人層にもカトリック信者が多数いたであろうから、一概に彼らを反教権主義の共感者ということではできないにしても、当時の宣教師が財産獲得に余念のない外国人商人層に対してしばしば嫌悪の言葉を漏らしているのを考えると、両者の間には、時には対立感情が存在することもあったのではないかと思われる。<sup>(10)</sup>

また、宣教師と商人層の間には、不平等条約の改正問題に関する両者の反応に端的に現れていたように、現実的な利害関係においても対立関係が存在していた。外国人商人層は、領事裁判権が失われることを望まず、条約改正に強く反対していたが、一方、キリスト教の宣教師側は、条約改正によって日本国内における移動と居住の権利を得て、布教活動の自由が得られることを理想としていたのである。<sup>(11)</sup>アーネスト・サトウは、駐日公使時代の日記（一八九五年十月二十一日）に、エヴラールが条約改正を日本人の希望通り一八八二年の時点で行くべきであったという意見を述べたことを書いてい

る。<sup>(12)</sup>

これに対して、ミシヨは、『アンデパンダンス・トンキノワーズ』の通信文で条約改正に反対し、これに賛意を表しているコラン・ド・ブランシーを揶揄していた。<sup>(13)</sup>日本の官憲からその諷刺活動の処分を受けたことのあるビゴーも、一八九九年、条約改正によって治外法権の特権がなくなることを嫌って日本から離れた人物であり、この点においても彼らは宣教師と全くの対立関係にあった。

### 3 在日フランス人の反教権主義とフランス公使館の対応

エヴラールと在日フランス公使館を攻撃する反教権主義者の一連のキャンペーンに対して、コラン・ド・ブランシーが本国外務省に報告していたことは、前節で指摘した通りである。彼は、また、フランス本国に帰国中であったシェンキヴィツ公使ともこの件で情報交換を行っている。

シェンキヴィツは、エヴラールの存在を榮進の妨げとみなして煙たく思う公使館の元フランス人通訳者のジョゼフ・ドートルメール (Joseph Dautemer) やジュール・アダン (Jules Adams) がこのキャンペーンに関与しているのではないかと疑っていた。<sup>(14)</sup>彼は、本省が日本にモラルの低い通訳官ばかりを派遣してくることに關して不満を漏らしているので、ドートルメールやアダンを冷遇したのは、彼であることが明らかである。先述したように、ミシヨは、エヴ

ルールが画策して彼以外の通訳官を追いついたと批判していたが、実際のところ、フランス公使その人がエヴラールを別格扱いしていたわけである。

コラン・ド・ブランシーは、当初、フランスの横浜領事アントニー・クロブコウスキー (Antony Klobukowski) が、インドシナ植民地に在任中に面識のあったミシヨを横浜に呼びよせた張本人にもかかわらず、公使館に対する彼の攻撃を放置して、情報を何も公使館に報告してこないと考えて、クロブコウスキーの非協力的な姿勢に不満を抱いていたようであり、この旨を本省宛の報告書 (一八九二年八月二十二日) で批判的に述べていた。<sup>(106)</sup>これに対して、シエンキヴィッチは、コラン・ド・ブランシー宛の私信 (一八九二年十月二十二日) でクロブコウスキーが外務大臣にこの件を完全に弁明したことを報告している。<sup>(107)</sup>コラン・ド・ブランシーも、一八九二年末に書かれたビゴの諷刺画に関する報告書では、クロブコウスキーに対する以前の否定的評価を改めており、彼が前年にビゴに対して適切な処置を取っていたことを指摘している。

クロブコウスキーは、一八九一年春頃、ビゴから日本の名所旧跡を画入りで紹介する著作の製作に対してフランス政府から助成金を支給されるように斡旋の依頼を受けていた。この出版計画の趣旨に賛同したクロブコウスキーは、ビゴをこの仕事の適任者であると認め、彼が経済的支援を受けられるように本国の官庁に対して推

薦をしていた。<sup>(108)</sup>この時のクロブコウスキーの書簡 (一八九一年四月七日) には、彼に宛てられたビゴの手紙が引用されているが、そこでビゴは、自分の計画に関して、おおよそ次のように語っている。

ヨーロッパでは、従来から史跡保存の活動が行われ、また、史跡の記録も実行されてきたのと比較して、日本では史跡保存に関する配慮が社会的に存在しない。このような現状は、日本では、ヨーロッパと異なっており、頻発する自然災害のために史跡が破壊されやすく、また、近年では急激な近代化によって伝統的な景観が損なわれるままになっているだけに、大変、嘆かましい。日本では更なる景観破壊が進行していく恐れがあるだけに、史跡が損なわれる前に、古き日本の遺産を記録した信頼しうる著作が書かれることが望ましいであろう。従来の日本歴史に関する書籍に掲載された図像は、史跡の主だった箇所のみを描いたものであり、対象の全体像やその細部に関して正確な情報を読者に与えないという欠点があるから尚更である。このような出版物の制作を年来志しながらも、資産のない自分は、生活の資を得るために、実入りの早い諷刺画を出版せざるを得ず、念願の仕事に長らく取り掛かることができなかった。このような企図の実現には、少なくとも二、三年の間、他の仕事に煩わ

されることなく、製作に専念する必要があるために、フランス政府から月当たり二百円の助成を受けることを希望する。

これは助成金を求める書簡であるだけに、ビゴーが自分の置かれた状況を誇張している可能性も考えられるが、少なくともこの文面からは、ビゴーが、自分の著作の計画に相当の自信をもち、かつその実現を強く望んでいたこと、そして、彼が自分の諷刺雑誌の刊行を生計獲得のための手段と割り切っていたことが確認できる。

しかし、クロブコウスキーのビゴーに対する好意は、『ル・ポタン』に掲載された在日スペイン公使に対する諷刺画が、当の公使を不愉快にさせていた事実を知った後に失われ、彼は、ビゴーに対する経済的支援の斡旋依頼をとり下げる書簡（一八九一年八月八日）を本省に送らざるをえなくなった<sup>(10)</sup>。このビゴーの諷刺が引き起こした事態に関してクロブコウスキーから相談を受けていたシェンキヴィッチは、同国人の仕出かした不始末を謝罪するため、スペイン公使の元へ伺うことを彼に薦めている<sup>(11)</sup>。クロブコウスキーが、この一連の経緯をビゴーにどのように伝えていたのかはわからないが、ビゴーが、エヴラールを批判する諷刺画を製作するのはその後約一年にも満たない時期のことであるので、彼は、内心、通訳官エヴラールの画策によって、彼の助成金の受給が不可能になったと考えていた可能性もあるであろう。コラン・ド・プランシーは、後の外交報

告書（一八九二年十二月三十一日）で、この出来事以降、経済的に不安定な状況に置かれていたビゴーが公使館に対する敵意を募らせた<sup>(12)</sup>とみなしており、それまでのビゴーは、たとえ公使館員を諷刺に採り上げることがあっても一定の節度を越えることがなかったと指摘している。

コラン・ド・プランシーの文章にビゴーの名前が初めて現れるのは、一八九二年九月十日のシェンキヴィッチ宛の書簡であるが、『アンデパンダンス・トンキノワーズ』の同年六月八日号に掲載された通信文には、コラン・ド・プランシーが『ル・ポタン』の第二期、第二号（ビゴーによる最初のエヴラール批判の諷刺画が掲載された号）の発刊を阻止しようと働きかけた<sup>(13)</sup>と揶揄されているので、もしこれが事実なら、彼はビゴーの諷刺画の発刊前にその動きを察知していたことになる<sup>(14)</sup>。ただ、この九月十日の書簡で、コラン・ド・プランシーは、ミシヨールの通信文とビゴーの諷刺画の内容の共通点の多さを指摘しながらも、その一致を不審に思っており、この時点で彼はビゴーの活動を特に把握していなかったように思われる。恐らく、彼は、この時期まで、日本国内の少数者にしか読まれる可能性のないビゴーの諷刺画よりも、仏領インドシナの新聞に掲載されるミシヨールの記事が引き起こす反響をより重く懸念しており、ビゴーの諷刺画には、それほど関心を向けていなかったのではないかと思われる。

一八九二年の秋頃、コラン・ド・プランシーは、シェンキヴィッチの指摘を受けて、クロブコウスキーのビゴーに対する過去の対応を知る機会を得ていたと考えられるので、ビゴーがフランスの外交官に怨恨感情をもっていたことを認識したはずである。そして、コラン・ド・プランシーは、同年十一月に、ビゴーから抗議の手紙を直接受け取り、彼を反教権主義者の中心人物の一人と考えるようになった。すでにこの時期、ミシヨールは日本から離れており、『アンデパンダンス・トンキノワーズ』による公使館攻撃が止んで三ヶ月以上が過ぎていた頃である。

ビゴーが手紙（一八九二年十一月四日）を送った動機は、彼が、一八九二年の天長節（十一月三日）当日に催される舞踏会に、当初、日本政府から招待される予定であったと信じていたにもかかわらず、実際は招待されなかったために、フランス公使館の反対のために自分が参加することが出来なくなったと考えて憤慨したためである。<sup>(16)</sup>

コラン・ド・プランシーは、このような非難は事実無根であり、公使館はそもそも日本政府がビゴーを舞踏会に招待したという事実を関知していないと返答（十一月六日）したが、ビゴーはこの答えを信用せず、再度、コラン・ド・プランシーに手紙（十一月十日）を送って、公使館の不実を詰問している。この私信で、公使館がエヴラーの影響下にあるため、非カトリック教徒の在日フランス人ではないがしろにするのだと批判しつつ、彼が、「自分は、公使館のお

偉い方々とは日頃のお付き合いはない」が、日本の上流社会の人々に親しい人物のいることを述べてその人脈を誇っているのは、彼の公使館への強い反感と負けん気の強い彼の性格をよく示している。

コラン・ド・プランシーは、後にビゴーが『ル・ポタン』（第二期、第六号）でこの件を取り上げた事を知ったが、同様の批判が『クーリエ・ダイフォン』（一八九二年十一月二十日、二十七日）の匿名通信文にも掲載されていることを確認し、この記事の筆者をビゴーと特定している。<sup>(17)</sup>

コラン・ド・プランシーは、ビゴーの画才を全く認めないわけではなかったが、フランス公使館とエヴラールに対する諷刺画集の発行を公使館に対する極めて悪質な誹謗とみなし、一八九二年末の外交報告書で、ビゴーの諷刺画に関して批判を行っている。<sup>(18)</sup> 次節では、ここで行われた報告を参照しながら、『ル・ポタン』における反教権的諷刺画の内容を考察していこう。

#### 4 『ル・ポタン』のエヴラール神父批判

##### ① 『ル・ポタン』

管見では、ビゴーが初めて諷刺画でパリ外国宣教会の宣教師を取り上げたのは、『ル・ポタン』（第一期、第四号、一八九一年）の「築地でのスナップ写真」と題する一枚の絵で、カトリックの宣教師が和服姿の日本人女性と路上で出会った場面を描いているものである。



当時、築地居留地には、司教座教会である築地教会があつたので、この教会の司祭をモデルにしたものなのかもしれない<sup>(19)</sup>。また、一八九二年刊行の英文詩画集『横浜バラード』*Yokohama Ballads*では、彼は挿絵を担当しているが、ここで、英字新聞『ジャパン・ガゼット』*The Japan Gazette*の編集者のペン先が、カトリック宣教師を突き刺している画を描いている<sup>(20)</sup>。

このようにビゴーは単発的にフランス人宣教師を取り上げて描くこともあつたが、彼の反教権的主張が徹底的に展開されるに至つたのが、エヴラル神父を標的にした『ル・ボタン』(第二期)であつた。この諷刺攻撃は、第二号から六号まで連続して計五回に亘つたもので、ビゴーの作品中、一人の人物を対象にこれほど集中的に攻撃を加えたものは他に例をみない(以下、『ル・ボタン』に関する言及は、全て第二期のものである。各諷刺画に言及するに当たって、例えば、第二号の五頁の諷刺画を示すのに、II-5というように表記する。頁は雑誌に記載されていないため、表紙を頁数に含めてカウントしている)。

発行日は記載されていないが、この五冊の諷刺画は一八九二年の初夏から年末にかけて不定期に刊行されていたようである<sup>(21)</sup>。販売は、横浜居留地と京都や神戸のホテルで行われていたが、部数はわからない<sup>(22)</sup>。読者は、フランス人をはじめとする西洋人にほぼ限られていたであろう。当時、この作品の日本人読者がいたとしても、反

教権的な主題に加えて、キャプションにフランス語の地口やフランスの流行歌の替え歌などが多用され、内容を理解できる者は少なかつたのではないかと思われる。

各号は、表紙を含め、十頁から二十頁ほどの枚数である<sup>(23)</sup>。各号の内容は独立しており、第二号は、カトリック教会におけるエヴラル、第三号は、フランス公使館とエヴラルの関係、第五号は、『仏文雑誌』とエヴラル、第六号は、フランス公使館とエヴラルの関係それぞれ主題に取り上げている。第四号だけは、様々な場所におけるエヴラルが描かれているが、特に主題のようなものは見当たらない。一部にはエヴラル批判とは関連のみられない画も含まれている。

『ル・ボタン』の表紙絵は全て共通で、ピエロが描かれたものである(VI-1、図6)。各号とも二頁目の扉絵が、その号の内容をおおよそ予告もしくは象徴するものになっている。連作の第一作にあたる第二号では、扉絵にカトリック神父が墓場の中に立つ画が載せられ、「僧院のなかの秘蹟劇、または通訳の最後の者」(*Les Mystères du Convent ou les dernières des Interprètes*)という表題がエヴラルに関する一連の劇が始まることを予告している(II-2、図7)。この画には屍の傍に立つエヴラルが描かれているが、これは彼が非聖職者のフランス人通訳官を犠牲にして公使館の通訳を長らく独占してきた人物であることを暗示したものである<sup>(24)</sup>。この連作で、神父は、

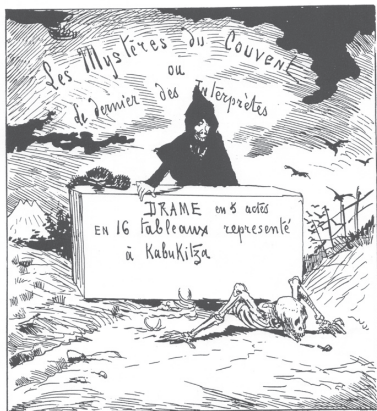
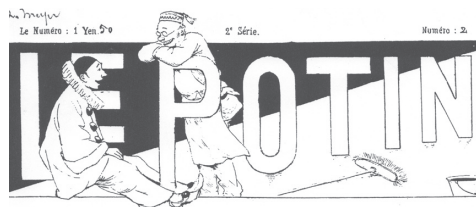


図7 『ル・ポタン』第2号扉絵

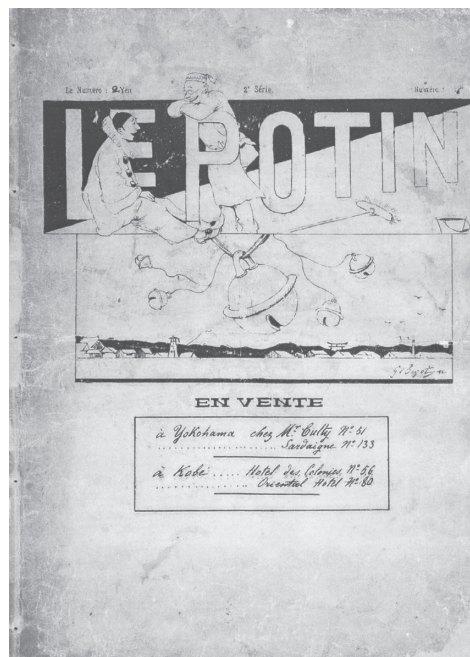
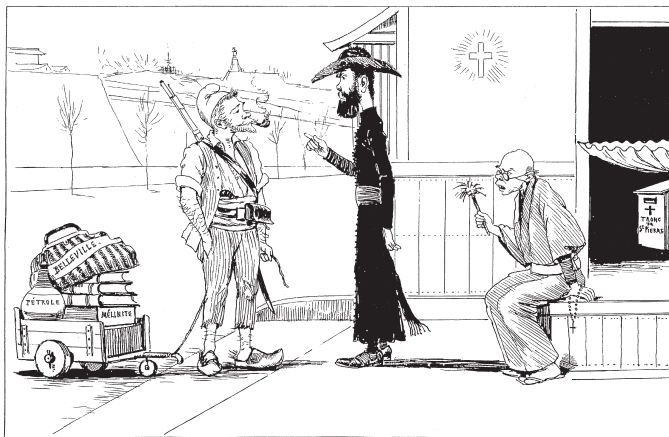


図6 『ル・ポタン』の表紙

「エラーール Erard」とほぼ実名に近い名前で登場し、また、各所（Ⅱ-2、16、Ⅳ-4）で通訳として紹介されていることや、画中の姿もエヴラール本人に似せられていることから、当時、彼を知る読者は諷刺対象を見まがえようがなかったであろう（以下の論述で、ビゴの描いた作中の神父に触れる場合、「エラーール」と表記する）。

ビゴのエヴラールに対する諷刺画は、ミシヨールによる批判と同様、通訳者としての資格で共和政フランスの外交に関わったエヴラールがフランス政府に面従腹背の態度をとっており、フランス人外交官を陰で操る腹黒い人物であると読者に印象づけることを狙ったものであった。この点において、彼の作品は、『アンデパンダン ス・トンキノワーズ』や『クーリエ・ダイフォン』で展開されていたミシヨールの一連の匿名通信の批判記事を画像化したという性格をもっていた。もともと、滞日期間の長くなかったミシヨールは、通信文の執筆にあたってビゴなどから情報を提供されていたと考えられるので、ビゴがミシヨールの一方的な影響下に諷刺画を製作していったというわけではなかったであろう。また、両者の批判は大部分共通しているとはいえ、ミシヨールの通信文は、同一趣旨の批判が繰り返されて、単調な反復感を免れていないのに反し、ビゴの諷刺画では、彼の反教権的想像力が赴くままに物語が奔放に展開されていた。



Quo cas, unde venias ???  
 Nam illud... wakarame!  
 Etes-vous pour la séparation de l'Eglise et de l'Etat... ???  
 Sans déquiesse... (oui)...

図8 エラール神父とコミュニナールの出会い

対立する人物として描かれている。ビゴーに当初「ル・ポタン」を連作化していく意思があったのかどうかはわからないが、第二号における「エラール」とコミュニナールの対立関係の描写は、次号以下の諷刺全般に関わ

## ② ベルヴィルとヴォジラール

ビゴーは、『ル・ポタン』連作の冒頭、フリジア帽を被り、サン・キュロットの姿をしたコミュニナールが、ライフルと火薬を持ちながら、日本のカトリック教会を訪問するという現実離れした導入部を設定している(Ⅱ-3)<sup>(17)</sup>。連作を締めくくる第六号の終幕で、「エラール」が仲間と共に処刑される場面(Ⅵ-19)に、このコミュニナールが立ち会っているように、この人物は「エラール」と常に

る彼の基本的主張が打ち出された重要な箇所と思われるので、以下の論点を詳しく確認していこう。

この未知の訪問者が教会に突然現れた時、「エラール神父」は、「あなたは、国家と教会を分離させるために来たのですか」と質問をし、この人物は、その通りと答える(Ⅱ-4、図8)。この場面は、パリ・コミューン臨時政府が、一八七一年四月、政教分離政策の実施を宣言した史実に基づいたものであり、ビゴーは、このコミュニナールを通して、カトリック教会は、政治や教育に関わるべきではないという共和主義者としての自己の主張を表したといえる。

この訪問者の返答に驚愕した「エラール」は、彼にその信条の帰属(「ラリマン」Ralliement)を問い質すと、彼は、「共和国とベルヴィル」(République et Belleville)と答える。これに対し、神父は、「教皇とヴォジラール」(Pape et Vaugirard)であると答えて(Ⅱ-6)、周囲の聖職者に命じて、このコミュニナールを捕縛する。

ここで「ラリマン」の言葉が用いられているのは、一八九一年に教皇レオ十三世が、フランス共和政を容認する政策(「ラリマン」)をとったことを諷したものだと思われる。この教皇庁の政策転換によって、一時的にフランス政府とカトリック教会の間に小康状態が生まれたが、フランスの反教権主義者は、これを教皇庁の策略と受けとめていた。<sup>(18)</sup> ビゴーも、この教皇庁の新方針を疑いの目でみていたのであろう。ここで、「エラール」に共和主義とカトリシズムの共

存を明確に否定させるセリフを吐かせているのは、カトリック教会側が共和政に対してあくまでも異質で敵対的な存在であることを示すためである。

ビゴーは、「エラーール」とコミユナールの対立関係を、それぞれ「教皇とヴォジラール」の組と、「共和国とベルヴィル」の組の間の対立図式として提示している。つまり、カトリック教会はヴォジラールと、共和主義はベルヴィルという、それぞれパリ市内の特定の地域と結び付けられている。

移民の集まるパリ左岸の下町地区として知られるベルヴィルは、パリ・コミューン時、最後の市街戦が行われた場所で、十九世紀末、パリにおける社会主義の温床となった左派色の強い地域であった。<sup>(19)</sup>

ビゴーは、作中でコミユナールを、マリアンヌ（フランス共和政を象徴する女性）を支持する側に立つ人物として行動させ、「社会主義の勝利」という旗を掲げさせている。いわば、彼は、このコミユナールを急進的共和主義者として自身の政治的立場を具現する人物として描いている。（Ⅱ-13）。一方、コラン・ド・プランシーは、外交報告書で、このコミユナールを「アナキスト」と呼んでいるが、これは穏健共和主義者の立場から、パリ・コミューンに対して否定的な彼の心情を示したものである。<sup>(20)</sup> このコミユナールに対する両者の評価の対極的な分裂に、彼らの政治観の相違が集約的に現れたといえよう。

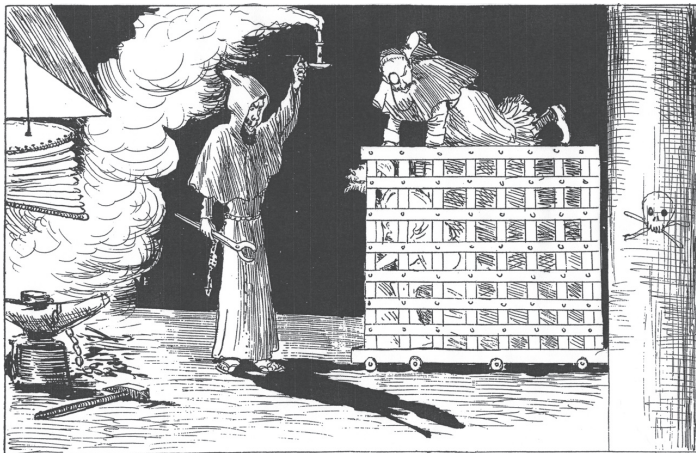
ビゴーにとって、共和主義は、決してカトリックと相いれないものであった。第二号では、「エラーール」は、表向きは、普通の教会の司祭であるが、陰ではコミユナールを拷問することを辞さない異端審問官として描かれている（Ⅱ-9、図9<sup>(21)</sup>）。また、第四号で、コミューン派の活動家が眠るパール・ラシエーズ墓地の門前に、礼服を着用した「エラーール」が立っている場面（Ⅳ-4）を描いているのも、民衆的なコミユナールと対照づける意図から行われたものであろう。

このように「共和主義」と結ばれているベルヴィル地区に対し、パリ左岸のヴォジラールは、カトリック教会と結び付けられている。この地名の選択は、当時、ヴォジラール通りにマリスト会が創設した寄宿学校があったことによると思われる。<sup>(22)</sup>

第二号では、「エラーール」の教会が火事に見舞われた時に、彼が各所に援助を請う電報を打つ場面（Ⅱ-10）がある。その連絡先は、「カトリック宣教師団」「マリア会 ヴォジラール通り」「イエズス会 セーブル通り」「カルメル会」「シャルトル会」「救世軍」「消防隊<sup>(23)</sup>」である。この打電の連絡先において、パリ左岸のヴォジラールは、「マリア会」の住所として提示されている。

エラーールが、パリ外国宣教会の宣教師であることを考えれば、この打電の第一の連絡先である「カトリック宣教師団」は、パリ外国宣教会を指していると考えられる。ただ、後続の「マリア会」と





Le père Joseph, nativement dit « Province Noire » devant la cage de la Bader...  
Brrr... Brrr... Brrr...  
(Album de Jean Paul Sartre)

図9 コミュナールを拷問するエラール

「イエズス会」には、それぞれ所在先が附記されているのに対し、この「カトリック宣教師団」には、所在の場所が明記されていない。本来、ここでは、同会の名称と所在地である「バック通り Rue du Bac」が出てくるところであろうが、パリ外国宣教会に対する知識不足から、ビゴーは、「カトリック宣教師団」としか書くことができなかったのであろう。<sup>(14)</sup>

「マリア会」の所在地である「ヴォジラール」がカトリック教会と関連する地名として選ばれた背景には、ビゴーがパリ外国宣教会の所在地を知らなかったという消極的な事情とは別に、コラン・ド・

ブランシーの出身校であるイエズス会系学校が、「ヴォジラール」という通称をもっていたことも大きな理由であったに違いない。ミシヨールは、『アンデパンダンス・トンキノワーズ』の匿名通信文で、コラン・ド・ブランシーの母校を通称の「ヴォジラール」の名で言及している<sup>(15)</sup>ので、この情報はビゴーも共有していたと考えられるからである。恐らく、上記の理由から、『ル・ポタン』の連作で、ヴォジラールはカトリック教会を象徴する名称としてビゴーに採用されることになったのだと思われる。

### ③ 『仏文雑誌』

『ル・ポタン』の第四号と第五号では、『ヴォジラール雑誌』*Revue de laugirard* という定期刊行物が「エラール」の関わる雑誌として諷刺されている。この「ヴォジラール雑誌」のモデルとなったのは、一八九二年、法学者ギユスターヴ・エミール・ポアソナード (Gustave Emile Boissonade de Fontarabie) を編集者・発行責任者にして発刊された学術雑誌『仏文雑誌』*Revue française du Japon* である。<sup>(16)</sup> この雑誌は、仏学会 (La Société de langue française) の機関誌として、一時の休刊を挟みながら一八九七年まで刊行されたものであり、フランス語で日本社会や文化を論じた最初の専門雑誌として現在でも高い評価を受けている。

ただ、刊行当時、『仏文雑誌』は、在日フランス人のすべてから



好意をもたれていたわけではなく、ミシヨーは、『クーリエ・ダイフォン』の匿名記事（一八九一年五月二十六日）で、同誌が第三号まで刊行したにすぎない段階で、すでに題材を探すのに困っているのが現状だとその誌面の貧困ぶりを揶揄していた。また、彼は、「情報的価値からいうと取るに値いしないこの雑誌は、フランスの一部の外交官らが、一般人を犠牲にして宣教師の為にばかり働き、日本からの利益をすべて宣教師に還元しているという、自身らに向けられた批判に應えるために発刊されたものである」と書いている。<sup>(17)</sup>このことから明らかなように、ミシヨーは、『仏文雑誌』の刊行をフランス公使館が宣教師を優遇してばかりいるという居留民からの批判をかわすために開始した世俗的事業として捉えていた。先に見たように、ミシヨー自身、日本文化に関心が深く、インドシナの新聞に日本関連の通信記事を盛んに執筆していた人物であったので、この批判は、この学術雑誌の執筆陣に加わることができない彼の羨望とも無縁ではなかったかもしれない。

一方、ビゴは、『ル・ポタン』で、「ヴォジラル」という形容を雑誌に附けたことにかがえるように、この『仏文雑誌』をカトリック教会の機関誌とみなして諷刺している。この事実、彼が別の箇所での雑誌を『黒服雑誌』*Revue Noir* (IV-7) と呼んでいることから明らかである。<sup>(18)</sup>

ボアソナードはカトリック信者であり、自由思想を嫌っていた人

物であるが、『仏文雑誌』をカトリック雑誌として編集していたわけではない。ただ、エヴラルは編集委員会の一員ではなかったとはいえ、この雑誌の編集に深く関わっていた。彼は、すでに一八八七年から『仏文雑誌』の発行母体となる仏学会の一員であり、総会にも当時のフランス人有力メンバーとともに参加している。<sup>(19)</sup>『ル・ポタン』には、「東洋語学学会 *La Société des langues orientales*」の会合で、僧服姿の「エラー」が発表をしている場面 (IV-8、図10) があるが、この集まりにはコラン・ド・プランシーら外交官の姿も見えることから、仏学会の集会を諷刺したものではないかと思われる。

一八九三年九月にエヴラルは、宣教会から休暇をもらい、フランスに一時帰国したが、この時、『仏文雑誌』の時評（無署名であるが、筆者はボアソナードであると考えられる）は、彼に感謝の辞を表明し、『仏文雑誌』は、エヴラル神父の貴重な助力を一時的とはいえ、失うことになった。外国人にはまれなほど学術的な日本語にも精通した神父のおかげで、法律や公文書の翻訳を掲載することができたことに感謝している」と書いている。また、日本社会や文化に関して造詣の深いエヴラルは、同誌に掲載される記事の査読も引き受けていた。<sup>(20)</sup>『ヴォジラル雑誌』の編集部で、「エラー」が、主力メンバーとして描かれている場面 (V-3、図11) があるのも、『仏文雑誌』の編集で、ボアソナードがエヴラルの協力を



図10 東洋語学学会（『仏学会』がモデル）の集会で発表するエラー



図11 「ヴォジラール雑誌」（『仏文雑誌』がモデル）の編集部

仰いでいた事情を承知していたからなのであろう。<sup>(16)</sup>

なお、この『仏文雑誌』とパリ外国宣教会の宣教師との関わりは少なからぬものがあり、エヴラールは、「日本の植物性蠟」（第二一三号、一八九三年）と「近代以前の日本における部落民」（第二二、二二三号、一八九三年）の二編の論文を寄稿していた。他にも、リュシヤン・ドルワール・ド・レゼー（Lucien Drouart de Lezey）の北海道旅行記（第二一、二二二号、一八九二年）や、ノエル・ペリ

（Noël Peri）の能に関する論文（無署名）と翻訳が掲載されている。<sup>(16)</sup> 時評欄には、「日本における教階制」（第三号、一八九二年）や、大阪司教のミドンの追悼記事（第一六号、一八九三年）が掲載されているほか、暁星学校に関する近況も伝えられており、この雑誌がカトリック教会に好意的であったことは明らかである。また、ボアソナードは、彼の論文「日本における公的扶助」（第一九・二〇号、一八九三年）で、パリ外国宣教会員による御殿場のハンセン病治療の

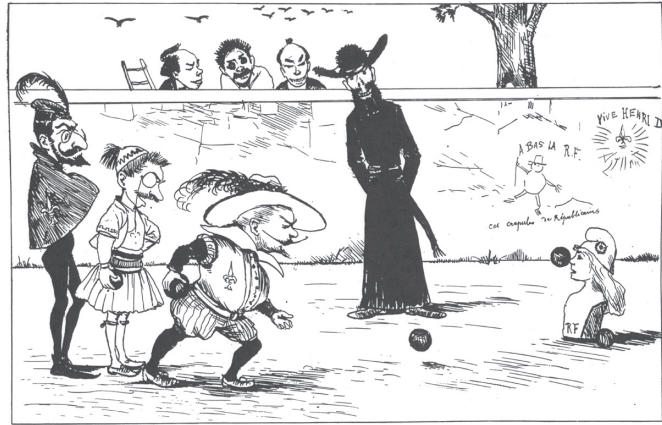


図12 「ヴォジラール学校」の校庭

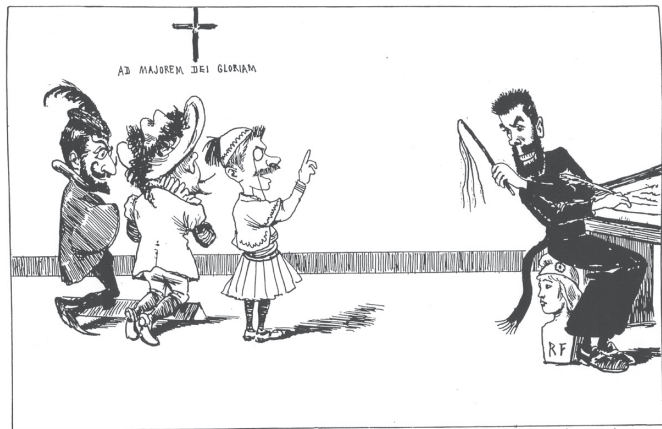


図13 「ヴォジラール学校」の教育

とは異なり、『ル・ポタン』のそれは、暁星学校そのものの批判を試みたものではなかった。<sup>(10)</sup>

「ヴォジラール学校」は、「エラーール」が教師を務める反共和主義的なカトリック学校として描かれている<sup>(14)</sup>（Ⅲ－15、図12）。ここで彼の生徒として描かれたのが、フランス公使館のコラン・ド・プランシー（「ペルシー Percy」という名前で現れる）とその配下の二人の外交官である。この二人の外交官は、『ル・ポタン』作中で、「ブランディ Brandy」（Ⅴ－5、11、Ⅵ－11、19）、「ラ・ド・カーヴ Rat de Cave（倉庫にいるネズミ）」（Ⅲ－14、Ⅴ－2、4、12、Ⅵ－19）

事業（後の神山復生病院）について賞賛している。

#### ④ エヴラールとフランス人外交官

『ル・ポタン』では、ヴォジラールの地名は、「ヴォジラール学校」という名称でも使われている。「ヴォジラール」が、「マリア会」と結び付けられていたことを考えると、この学校は、暁星学校を念頭においたものであるが、第二章でみた『トバエ』の諷刺画

と呼ばれており、それぞれ、秘書のラファエル・ド・ボンディ（Raphaël de Bondy）と公使館員のモリス・カズナーヴ（Maurice Cazeneuve）のことをモデルにしたものと思われる。<sup>(15)</sup>

コラン・ド・プランシーは、イエズス会系学校を卒業生であることを『アンデパンダンス・トンキノワーズ』の通信文で批判的に言及されていたが、この二人の配下の外交官もまたカトリック系学校の出身者であった<sup>(16)</sup>。フランス人外交官が、ビゴの諷刺画でカトリ

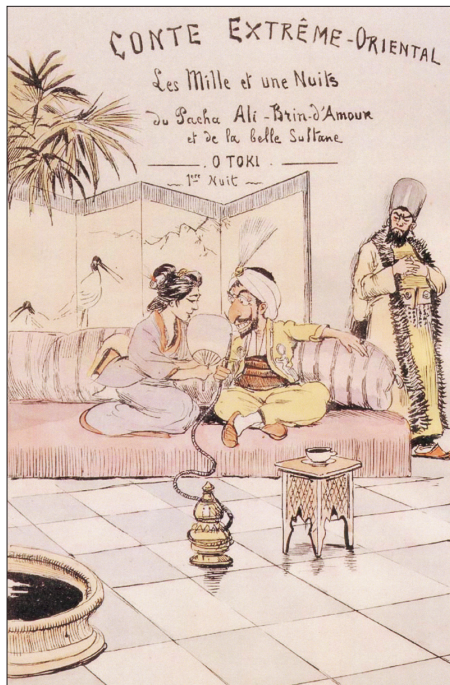


図14 『ル・ボタン』第6号扉絵

ック学校の生徒として描かれたのは、彼らが現実にカトリック系学校の卒業生であることがビゴーの念頭にあったためであろうが、また、彼らがエヴラルの指導下にあることを示すために、カトリック学校という舞台が格好のものと考えられたからに違いない。

この「ヴォジラール学校」を描いた場面には、マリアンヌの胸像に腰掛けた「エラル」が、教室で外交官の生徒たちに「日本には、何人の大司教と司教がいますか」と質問をする画がある(Ⅲ-14、図13)。生徒たちは、「神父様、大司教が一人、司教が三人です」と答えている。戯画化されたものとはいえ、この場面は、一八九一年に、日本のカトリック教会において教階制が成立し、東京に大司教区、函館、大阪、長崎を中心に置く各司教区がそれぞれ成立したこ

とに關して触れたものである<sup>(15)</sup>。

ビゴーは、エヴラルを現実政治に関わった聖職者として描こうと様々な試みをしている。彼は、「エラル」を、「ジョセフ神父 Père Joseph」<sup>16</sup>、「黒色の卿下 Eminence noire」と呼んでいる(Ⅱ-9、15、16、17)が、これはリシュリユー枢機卿の腹心の友人であったカプチン会のジョセフ神父、異名が「灰色の卿下」黒幕 Eminence brise<sup>17</sup>として知られる聖職者にちなんだものであった。第六号の扉絵(Ⅵ-2、図14)で、「千夜一夜物語」風の宮廷で、後方から無能な王(「ペルシー」)をうかがう黒幕らしき高位聖職者として「エラル」を描いているのも、同様の意図から行われたものである。第四号の扉絵(Ⅳ-2)では、「新しいタレーラン」ペリゴール<sup>18</sup> de nouveau Talleyrand-Périgord<sup>19</sup>として、「エラル」をタレーランに擬しているのも、フランス革命や第一帝政期を潜り抜けて復古王政の確立に大きな働きをしたこのフランスの政治家が、元々は聖職者であり、策略をめぐる人物としてビゴーの意識にあったからであろう。

このように、「エラル」は、公使以上に実力ある人物として各所で描かれているが、この後者の前者に対する従属関係を直接公使館を舞台として描いたのが、『ル・ボタン』の第六号である。前節でみたように、ビゴーは、一八九二年の天長節の祝賀会に参加出来なかった原因をエヴラルの画策によるものであると考え、コラ



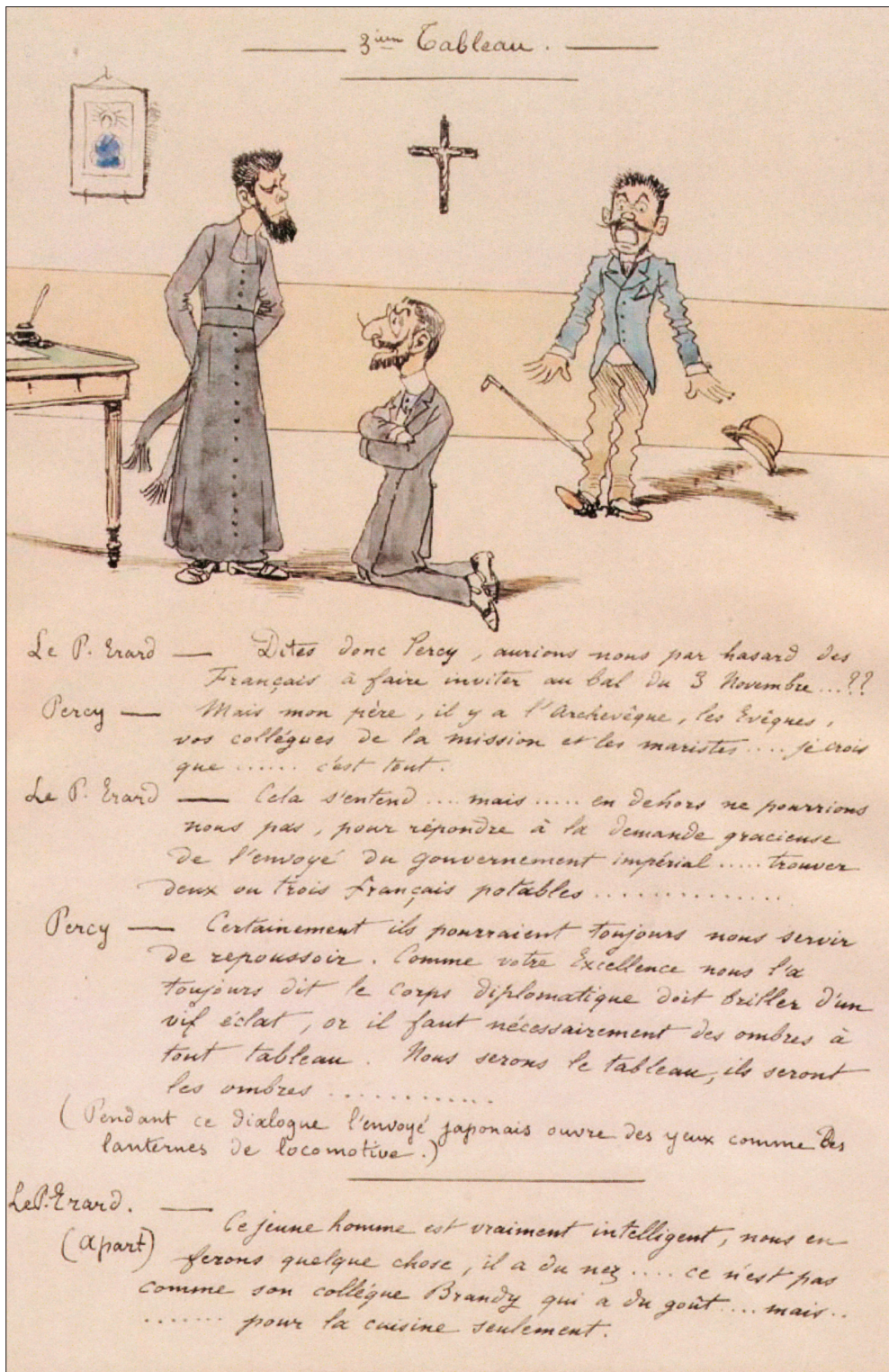


図15 エラールに跪くベルシー



ン・ド・ブランシーに直接手紙を送りつけて抗議していた。ここで彼は、彼個人にとって心理的眞実であったこの「事件」を題材に取り上げて、次のように物語化している。

日本政府の使者が、天長節の祝賀会に在日フランス人を招待するため、フランス公使館に打ち合わせに訪れた時、公使館の日本の受付は、彼に、フランス公使館には「お笑いの公使 *le Ministre pour rire*」と呼ばれている名目上の公使と、「眞の公使 *le vrai Ministre*」の二人がいることを紹介する（Ⅵ-9）。前者は「ペルシー」であり、公使館の実権を握る後者は「エラーール」である。使者は、無論、打ち合わせの可能な後者との面会を希望し、招待者のリストを求めるが、これに対して、「エラーール」は、「フランス公使館は、同国人のことを決して気にかけない」ので、関知していないと述べる（Ⅵ-10）。次の場面では、「エラーール」に呼ばれて現れた「ペルシー」が、僧服姿の「エラーール」に跪き、招待が予定されているフランス人は教会関係者だけであると答えるのであるが、その会話を側で聞いている日本政府の使者は仰天している姿で描かれている（Ⅵ-11、図15）。

このように『ル・ポタン』ではフランス公使館がカトリック聖職者の指導下にあることが強調されているが、それに対応するように、公使館員は、「エラーール」ともども、本国の共和政府に対して不実な存在として描かれている。共和政フランスは、マリアンヌの姿

で表象されているが、彼女は、常に「エラーール」や公使館員の被害者として現れる。例えば、『ル・ポタン』第三号では、「エラーール」及び彼の配下の外交官がマリアンヌに忠誠を装って、共和国の助成金を貰い受けているが（Ⅲ-12、図16）、その裏で彼らは彼女のことをあざ笑っているのである（Ⅲ-13、図17）。「エラーール」が、ジョルジュ・ブーランジェ將軍（一八八〇年代末にフランス共和政を揺るがしたブーランジェ事件の主役）に擬せられている諷刺画（Ⅱ-11）もあるが、これもまた彼が反共和主義的な存在であることを示そうとしたものであろう。

この連作は、最後、「エラーール」と「ペルシー」ら公使館員が壁を背にして銃殺された場面で締めくくられているが、これは明らか

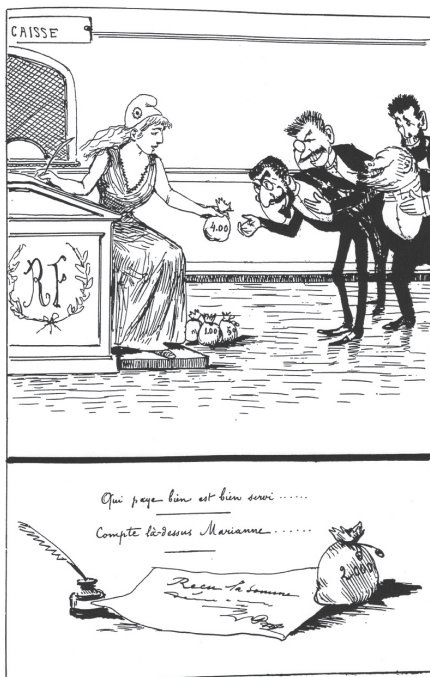


図16 マリアンヌから助成金を貰う

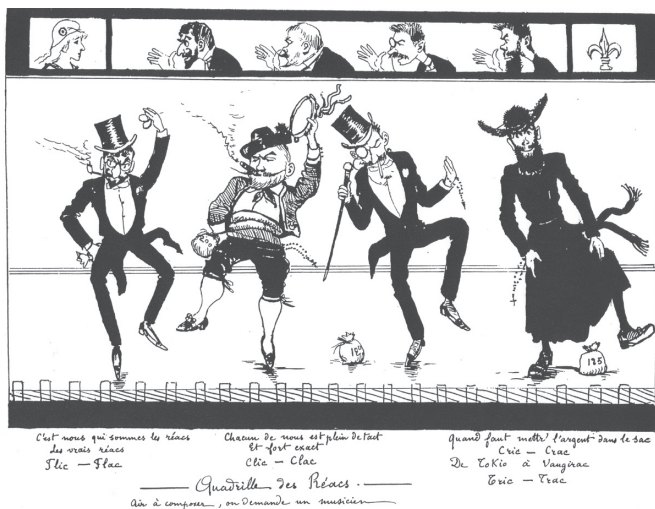


図17 マリアンヌをあざ笑うフランス人外交官たち



図18 公使館員らが銃殺される場面

に一八七一年、コミューン派の残党が「連盟兵の壁」で銃殺刑に処せられたことを念頭において描かれたものと思われる（Ⅵ・20、図18）。この諷刺画の結末は、コミューン派が最期を遂げた舞台の設定を逆転させることによって、急進的共和派としてのビゴーが、約二十年前、子供時代に目の当たりにしたパリ・コミューンの敗北に對し、想像上の復讐を果たしたものといえるであろう。<sup>(18)</sup>

当時、日本ではイエズス会が活動していなかったにもかかわらず（イエズス会の再来日は、一九〇八年）、この作品にイエズス会（Ⅴ・8）や創立者のイグナチオ・デ・ロヨラ（Ⅴ・3）の名前、また、AMDG (Ad maiorem Dei gloriam「より大なる神の栄光のために」というイエズス会の標語（Ⅱ・12、17、Ⅲ・10）が見られることは、この作品が、「イエズス会神話」の影響のもとに製作されたことの

⑤ 『ル・ボタン』の反響  
以上、われわれは、『ル・ボタン』の解釈にあたり重要と思われる諸点を取り上げてきた。この連作は、実在のエヴラールに想を得ながらも、ビゴーが、ミシヨと協働しながら、反教権的主張を自在に展開させた作品というべきで、その批判がどれだけ神父の実像に即しているかを問うのはあまり意味のないことであろう。

あらわれである。<sup>(14)</sup> マリア会の修道士らが、『トバエ』(図2)で、カラスとともに来日する姿が描かれていたことは先に見た通りであるが、『ル・ボタン』にもカラスは、各所によく描かれている。そのほか、教会関係者を「ねずみ Rat」(V-11)や「ゴキブリ Cafard」(III-3, V-5, 11, 19)に例えているが、これらの事例は、フランス本国で使われていた聖職者批判のコードをビゴーが受け入れていたことを示している。<sup>(15)</sup>

これらの特徴は、彼の諷刺画が当時の日本のカトリック宣教師の実態をリアルに批判することを試みた作品というよりも、本国フランスの反教権的諷刺画の影響下にビゴーが空想をめぐらせて描いた作品であることを明らかにしている。このように、ビゴーの諷刺は、彼の反教権主義が先立ってカトリックに対する敵意だけが目立っていたため、その作品を歓迎していたものは、ミシヨーなど彼と同様の意見をもつフランス人に限られていたであろう。一八九三年にエヴラールがフランスに一時帰国をした時、多くの知人が見送りに訪れていることから、<sup>(16)</sup> ビゴーの諷刺画がエヴラールの信用を落とすことに成功しなかったことは明らかであり、彼を直接知る者には、それらは根拠のない中傷としてしか受けとめられていなかったと思われる。

エヴラールを諷刺したビゴーの作品が当時のカトリック教会でどのような反響を呼んでいたのかはわからない。すでに『トバエ』に

おいてマリア会に対する諷刺画が発表された後、彼が教会関係者から要注意人物とみなされていたことは間違いないので、エヴラールに対する諷刺活動も当初から注視されていたであろう。東京大司教区からパリ外国宣教会本部に送られた一八九二年度の報告書では、暁星学校が「宗教の憎悪からこれを害しようとする劣劣な圧力」を蒙っていたことが述べられているが、<sup>(17)</sup> この年、反教権主義者から執拗に攻撃を受けていたのは、むしろエヴラールであったことを考えると、報告書のこの箇所は、エヴラールに対する批判に関して直接的な言及を避けるため、暁星学校に向けられた攻撃に仮託して言及されたものではないかと思われる。オズーフ東京大司教は、この一連のキャンペーンがフランス公使館や在日フランス人社会と深く関わる出来事であるだけに、この問題に関する発言が思わぬ反響をもたらしことを懸念して、外部に知られる可能性のある本部への公式報告に直截に記すことを憚ったのではないだろうか。

フランス公使館では、シェンキヴィッチ公使やコラン・ド・プランシー代理公使が、ビゴーの諷刺活動を敵視してきたことはすでに見てきた通りであるが、<sup>(18)</sup> 特に後者は、『ル・ボタン』に関する外交報告書を作成し、ビゴーをインドシナの裁判所に召喚して、公使館への名誉毀損罪で訴えることを外務大臣に具申ししている。<sup>(19)</sup> このような措置は、結局取られることはなかったが、フランス公使館は、『ル・ボタン』の刊行後にも、ビゴーの動向に関心を失うことはな

かった。シェンキヴィツチの後任者であるジュール・アルマン (Jules Harmand) 全権公使は、日清戦争時のビゴの取材記者としての中国大陸行きや彼の諷刺画集の発行に関して、外交報告書で言及を行っているが、後者に関する報告 (一八九五年) では、ビゴについて、「外務省内ではその名はあまり好感をもつて知られていないが、その芸術家的才能は議論の余地のない」人物と記している。<sup>(10)</sup>

#### おわりに

本論で、われわれは、フランス人聖職者に対するジョルジュ・ビゴの諷刺活動を在日フランス人社会の中の反教権的動向の中で捉え、その作品の内容と反響を一瞥してきた。ビゴは、現在、明治日本の社会や風俗の鋭い観察者として広く認められ、彼の諷刺画は、自由民権運動に対する彼の共感に代表されるように、自由と平等を重視する共和主義的理念のもとに展開されてきた点が評価されてきた。しかし、彼の政治的立場は、同時代の本国フランスの共和主義者と同様に、カトリック教会に批判的なものであり、同国人の聖職者に対する敵意に満ちた諷刺活動も彼の一面の姿であった。

ビゴの反教権的諷刺画は、彼の才気を十二分に示したものであったが、現実在即した批判ではなかったため、一人合点な諷刺として批評性を失い、自己完結している面のあることは否定できない。彼の作品の批判対象になった側が、彼の無理解を指摘し、作者に軽

侮の念を示していることは、その事情を明らかにしている。しかし、彼の作品が、反感を抱いた読者に対しても強い印象を与えていたことは事実であり、そこに諷刺画家としての彼の優れた力量をうかがうことができよう。

ビゴら反教権主義者は、カトリック宣教師達を反共和主義的、反フランス的存在とみなして非難していたが、一方、在日フランス公使館は彼らをフランス文化の普及者として高く評価していた。この評価の対立は、フランス人であると同時にカトリックの聖職者であるという宣教師のアイデンティティの二重性ゆえのものであった。明治期日本におけるフランス人の反教権主義批判は、宣教師の「フランス人」としての国民性が、在日フランス人社会において問題化していたことを如実に伝えている。

#### 謝辞

本論は、筆者がフランスで発表した二つの小論を土台に、大幅な加筆及び訂正を加えて作成したものである。貴重な発表の場をいただいた「学際的カリカチュア研究グループ (EIRIS)」のコロック (二〇〇八年五月二十三日) と、「キリスト教宣教・文化変容に関するヨーロッパ研究センター (CREDDIC)」のコロック (二〇〇八年八月三十日) の関係者の方々に感謝の意を表したい。

Asushi, Yamashita, "Georges Bigot et les caricatures anticléricales contre



la Société de Marie,” *Ridiculusa*, n° 15, 2008, pp. 373-383. Id., “Les caricatures anticléricales de Georges Bigot contre le Père Eyraud (Missions Étrangères de Paris) à la fin du XIX<sup>e</sup>ème siècle au Japon,” *Images et diffusion du christianisme. Images et expressions graphiques en contexte missionnaire*, Paris: Karthala (à paraître).

本論は、ビゴー研究者の方々の先行研究に多くを負っている。ビゴー作品の調査は、横浜開港資料館と伊丹市立美術館で行わせて頂いた。本論に掲載した図版に関しては、『トバエ』第四一号はマリア会文書館に所蔵された原書を、『ル・ボタン』（第二期）の第二号から第五号までは横浜開港資料館の複製資料を、第六号に関しては伊丹市立美術館の原書をそれぞれ用いている。エミール・コンプを描いたビゴーの作品は、フランスの諷刺画研究者ギヨーム・ドワジ（Guillaume Doizy）氏の個人所蔵のものであり、本論での掲載にあたっては同氏の御厚意に与った。

フェリクス・エヴラールとヴィクトール・コラン・ド・ブランシンの肖像写真は、それぞれバリ外国宣教会文書室とフランス外務省史料館の所蔵のものを使用して頂いた。

## 注

- (1) 東京都写真美術館、東京新聞企画・構成・カタログ編集『ジョルジュ・ビゴー展…碧眼の浮世絵師が斬る明治』東京新聞、二〇〇九年、一一二頁。
- (2) フランス革命以降のフランス共和派とカトリック教会の対立関

係に関しては、以下の文献を参照のこと。谷川稔『十字架と三色旗—もうひとつの近代フランス』山川出版社、一九九七年。クロード・ラングロワ（谷川稔訳）『カトリック教会と反教権—世俗派—ビエール・ノラ編』記憶の場—フランス国民意識の文化—社会史』第一巻、岩波書店、二〇〇二年。

- (3) Cornevin, Hélène, “De la gravure à la caricature: le Japon de Meiji vu par Georges Bigot,” *Ethnographie*, vol. 86, n° 108, 1990, pp. 187-188. なおこの論文の邦訳版（下記）は完訳ではなく、カトリック教会への諷刺に関して言及された箇所は、省略されている。エレーヌ・コルヌヴァン（橋爪正子訳）『版画から漫画まで—ジョルジュ・ビゴーの見た明治の日本—清水勲編』続ビゴー日本素描集』岩波書店（岩波文庫）、一九九二年。

(4) 第三共和政期フランスの植民地における反教権主義の多様な展開を扱った近年の研究に、下記のものがある。Delisle, Philippe (sous la dir.), *L'Anticléricalisme dans les colonies françaises sous la Troisième République*, Paris: les Indes savantes, 2009.

- (5) 海老沢有道「明治新旧キリスト教の史的比較」『維新変革期とキリスト教』新生社、一九六八年、四七二頁。

(6) 明治時代にバリ外国宣教会の宣教師からフランス語を学んだ著名な人物には、森鷗外（小倉教会のフランソワ・ペルトラン神父）、島崎藤村（仙台元寺小路教会のクロード・ジャッケ神父）、大川周明（鶴岡天主公教会のルイ・マトン神父）などがある（カッコ内は、フランス語を教えたフランス人宣教師）。



(7) パリ外国宣教会の宣教師も、フランス文化の普及者として自己の果たしている役割に自覚的であった。Rolland, Edmond, "Le Français au Japon," *Bulletin de l'Alliance Française*, n° 127, 15 janvier 1912, pp. 5-6.

(8) 来日したパリ外国宣教会の宣教師は、大部分がフランス人であったが、ベルギーやルクセンブルクなどの出身者も少数存在していた。

(9) 澤護『横浜居留地のフランス社会』敬愛大学経済文化研究所、一九九八年、九五―一〇七頁。なお、同書(五頁)によると、一八八〇年の横浜居留地のフランス人数は、一〇二名である(イギリス人は五六七名、アメリカ人は二五〇名)。

(10) 蛸原八郎『日本欧字新聞雑誌史』大誠堂、一九三四年、八七―九一頁。蛸原は、『エコ』紙が日本政府に対して好意的であったと同紙の穩健的な論調を指摘している。

(11) 『エコ』や『クーリエ』を滞日中に目にする機会をもっていたフランス人旅行者の著書に下記のものがある。エドモン・コト(幸田礼雅訳)『ボンジュール・ジャポン：青い目の見た文明開化』新評論、一九九二年、六七頁。Verschuur, Gerrit, *Aux colonies d'Asie et dans l'Océan Indien*, Paris: Hachette, 1900, p. 104. Michel, Ernest, *Le Tour du monde en 240 jours: Canada, États-Unis, Japon, Chine et Hindoustan*, Tome I, Nice: librairie du patronage de Saint-Pierre, 1882, p. 201.

(12) *L'Echo du Japon*, n° 2987, 18 décembre 1879, pp. 1-2.

(13) マランと親しかったある日本人信者は、後年の回想で、マランが普仏戦争の勝者であるドイツに対して反感をもっていなかったわけではなかったが、ドイツ人に対して敵対的な行為を取ろうな偏狭なナショナリストではなかったこと、そして、彼が身よりのないドイツ人の老聖職者を養っていた人格者であったことを語っている。廣田星橋『昔の教会とマラン師』『子羊』第四巻、第十号、一九二六年、三〇―三二頁。

(14) ド・ロ神父に関しては、片岡弥吉の評伝(ある明治の福祉像：ド・ロ神父の生涯)日本放送出版協会、一九七七年)や原聖氏の研究(『ドロ神父の絵解き』『女子美術大学紀要』第二十六号、一九九六年)が存在する。

(15) *L'Echo du Japon* [Edition de la Malle], 7 février 1880, p. 4.

(16) あるフランス人旅行者は、滞日中、『エコ』紙の経営者が彼の為にフランス人宣教師の下でフランス語を学んでいた日本人を旅行案内人に雇ってくれたと旅行記に書いているが、このエピソードも『エコ』紙の関係者がカトリック宣教師と親しい関係にあったことを示しているよう。Chabrand, Emile, *De Barcelonnette au Mexique: Inde-Birmanie-Chine-Japon-États-Unis*, Paris: E. Plon, Nourrit et cie., 1892, p. 194.

(17) Eyraud, Félix, *Cours de langue japonaise en soixante leçons*, Yokohama: Impr. de "l'Echo du Japon," 1874.

(18) 著者は未見であるが、このマランの旅行記は、『北日本旅行記 Voyages dans le Nord du Japon』という書名で出版されている。

- Beillevaire, Patrick., *Le Japon en langue française: ouvrages et articles publiés de 1850 à 1945*, Paris: Ed. Kimé, 1993, pp. 18–19. 澤護『前掲書』一〇三頁。この旅行記は、フランスの『リッピン・カトリック』誌に一八七四年四月から十二月まで、「函館から横浜まで—J・M・マランの旅日記」という題で連載された。ドイツ語版の同紙 (*Die Katholischen Missionen*) に翻訳された独訳版からの邦訳が存在する。J・M・マラン (H・チースリック訳) 「東北紀行 (明治五年)—函館より江戸へ」『宣教師の見た明治の頃』キリシタン文化研究会、一九六八年。
- (19) Missions étrangères de Paris, *Bibliographie: missions étrangères & langues orientales: contribution de la Société des missions étrangères à la connaissance de 60 langues d'Asie*, Paris: L'Harmattan, 1997, p. 58. Cf. *Les Missions Catholique*, n° 612, 25 février 1881, p. 96.
- (20) *L'Echo du Japon* [Edition de la Malle], 10 janvier; 24 janvier 1880.
- (21) この『クーリエ』によるマラン神父批判は、フランス本国の反教権主義の雑誌でも紹介されている。“Chronique,” *L'Anti-clerical*, n° 106, 2 novembre 1880, p. 698.
- (22) *L'Echo du Japon*, n° 3218, 21 septembre 1880; n° 3221, 24 septembre 1880; n° 3226, 30 septembre 1880.
- (23) *Ibid.*, n° 3221, 24 septembre 1880. あるフランス人旅行者は、ジュスラン横浜領事のことを「共和主義者ではあるが、常に国家的な栄光を求める宣教師を保護してきた」人物と評している。Michel, Ernest, *op.cit.*, p. 277.
- (24) Archives de la Société des Missions Etrangères de Paris (ASMEP), Carton 573, Félix Midon à Henri Armbruster, Yokohama, 26 août 1880. Pierre Marie Osouf à la Supérieur Général de la Société, Tôkyô, 19 novembre 1880. マランが横浜の教会の説教でフランス政府の対教会政策を批判したという話が本国に伝わり、海軍大臣がパリの宣教会本部にマランの更迭を求めたという事情が、彼の異動の背景にあったように見える。ASMEP, Fiche individuelle (notice biographique), Jean-Marie Marin.
- (25) Un prêtre des Missions Etrangères de Paris, missionnaire à Tokyo, “La Mission de Tokyo,” *Les Missions Catholiques*, n° 2692, 14 janvier 1921, p. 20. この匿名論文の筆者は、リッピン・ドフエ神父 (パリ外国宣教会) である。
- (26) Bastide, Louis., *Mon premier séjour au Japon (1880–1882): Mémoires d'un vice-consul*, Dijon: Impr. de E. Jacquot, 1911, p. 66.
- (27) H.Bouvet という横浜在住のフランス人の『エコー』への投稿文 *L'Echo du Japon* [Edition de la Malle], 7 février 1880, p. 4.
- (28) パリ・コミュニケーションに参加した廉で国外追放になったある元コミュニケーション (クロード・フランソワ・ピサール) が、明治政府 (工部省) で御雇外国人として働いていたという例もあった。木下賢一「お雇い外国人になったコミュニケーション」『駿台史學』第七九号、一九九〇年。
- (29) Ronsay, Jeanne., “Un peintre Français au Japon: Georges Bigot,” *France-Japon*, n° 9, 1935, p. 199. Cornevin, Hélène., “Georges Bigot (1860

-1927), *Hommes et destins*, Tome VI (Asie), Paris: Académie des sciences d'outre-mer, 1985, p. 37.

- (30) Leroy, Michel, *Le mythe jésuite de Beranger à Michélet*, Paris: Presses universitaires de France, 1992, pp. 331-334. 林田遼右『ベランジェとてう詩人がいた：フランス革命からブルボン復古王朝まで』新潮社、一九九四年、一三八―一四六頁。

- (31) 清水勲・クリスチャン・ポラック『ビゴー小伝』清水勲編『ビゴー日本素描集』岩波書店（岩波文庫）、一九八六年、一五〇頁。以下、本論ではビゴーの伝記的事実に関して同書に多くを負っている。

- (32) なお、ビゴーは、『トバエ』で日本人のキリスト教伝道士も取り上げており、フランス人のカトリック聖職者だけが、キリスト教関係で彼の諷刺の対象になっていたわけではない。清水勲『ビゴーが見た明治職業事情』講談社（講談社学術文庫）、二〇〇九年、一八一―一九頁。

- (33) 一八八七年に刊行を開始した『トバエ』（第二期）で、ビゴーは日本社会の世相を鋭く諷刺していたが、エレヌ・コルヌヴァンは、マリア会の批判の掲載された第四一号から、『トバエ』はむしろ外国人居留地にぬくぬくと暮らすフランス人たちを標的とするようになる」と指摘している。エレヌ・コルヌヴァン、前掲論文、二二―三頁。ただ、マリア会の修道士に関しては、彼らは来日当初から質素な生活を送っていたことは、指摘されねばならない。

- (34) マリア会に関しては、下記の文献を参照。マリア会日本管区本

部編『マリア会日本渡来八十年』マリア会出版部、一九六八年。マリア会日本管区一〇〇年史編纂委員会編『マリア会日本管区一〇〇年のあゆみ：一八八八（明治二一）年―一九八八（昭和六三）年（歴史編）』燦葉出版社、一九九九年。

- (35) Cf. Lequeux, M., "Note sur l'enseignement du français au Japon," *Bulletin de l'Alliance Française*, n° 26, 1888, p. 200. ビゴーは、アリアンス・フランセーズの会員であったので、この会報の記事を読んでいた可能性がある。なお、これ以降の同会の会報記事では、マリア会の修道士を指すのに「Marianiste」の語が用いられていることが確認できる。

- (36) ビゴーは、文中で「到着」を表すフランス語に「Arrivage」の語を使っている。このフランス語の名詞は、通常、荷物の「到着」などに用いられるものであり、ビゴーがマリア会の来日に対してこの語を使用したことは、明らかに同会への侮蔑を表したものといえる。

- (37) Lalouette, Jacqueline, *La République anticléricale, XIXe-XXe siècles*, Paris: Seuil, 2002, pp. 318-320.

- (38) Dixmier, Michel, Lalouette, Jacqueline, et Pasamonik, Didier, *La République et l'Église: Images d'une querelle*, Paris: La Martinière, 2005, p. 9. 第三共和政期フランスの反教権主義的諷刺画に関する近年の研究には、この研究書の他に下記のものなどがある。Doizy, Guillaume, *À bas la calotte !: la caricature anticléricale et la séparation des Églises et de l'État*, Paris: Editions Alternatives, 2005. Cf. Saint-Martin,

- Isabelle, "La Caricature anticléricale sous la IIIe République," *Archives des Sciences Sociales des Religions*, n° 134, 2006.
- (39) 清水勲「解題」芳賀徹他編『ビゴー素描コレクション』：明治の世相』第二巻、岩波書店、一九八九年、一四四頁。
- (40) アリアンス・フランセーズの創立期を扱った研究に関しては、以下の文献がある。西山教行「アリアンス・フランセーズ成立について」のイデオロギー的考察」*Etudes didactiques du FLE au Japon*, n° 8, 1999, Chaubet, François, *La politique culturelle française et la diplomatie de la langue: L'Alliance Française (1883-1940)*, Paris: L'Harmattan, 2006.
- (41) *Bulletin de l'Alliance Française*, n° 11-12, 1886, p. 150. *Ibid.*, n° 18-19, 1887, p. 197.
- (42) *Ibid.*, n° 42, 1892, p. 124; n° 43, 1893, p. 39.
- (43) *Ibid.*, n° 20, 1887, p. 292.
- (44) Ambrogio, Albano (ed.), *Le centenaire de l'arrivée des Marianistes au Japon 1887-1987: Lettres et documents des AGMAR, 1885-1889*, Rome: Archives Générales Marianistes, 1985, pp. 162-163.
- (45) 一八八五年、ピエール・マリ・オズーフ司教が、教皇レオ十三世の親書を明治天皇に捧呈するため、皇居に参内した時、シェンキヴィッチが同行している。高木一雄『日本・ヴァチカン外交史』聖母の騎士社、一九八四年、二六五―二七二頁。
- (46) Archives du ministère des Affaires étrangères (AMAE), Correspondance Politique (CP), Japon, Vol. 32, Direction Politique (DP) n° 6, J. A. Sienkiewicz au Ministre des Affaires étrangères, Tôkyô, 17 octobre 1886. 松村菅和、女子カルメル修道会共訳『パリ外国宣教会年次報告』第一巻、聖母の騎士社、一九九六年、一四四頁。
- (47) エレーヌ・コルスヴァン、前掲論文、三八頁。清水勲『「トバエ」の全体像』清水勲編『明治の面影：フランス人画家 ビゴーの世界』山川出版社、二〇〇二年、一六四頁。
- (48) AMAE, CP, Japon, Vol. 35, DP n° 185, Joseph Adam Sienkiewicz au Ministre des Affaires étrangères, Tôkyô, 4 septembre 1891.
- (49) Lebon, Pierre, "L'Œuvre pédagogique des Marianistes Français au Japon," *Bulletin de la Société franco-japonaise de Paris*, n° 11, 1908, p. 21. ルボンは、マリア会本部で会報の編集などを行っていた修道士で滞日経験はなかったが、フランス本部に資料として送られてきた『「トバエ」を見る機会をもっていたのであろう。なお、ルボンは、教会関係者を前に行った講演でも、暁星学校が創設間もない時期に「あらゆるまな反宗教的な敵意」に出会ったことを述べている。Id., "L'Apostolat par l'éducation au Japon," *Revue du clergé français*, n° 315, 1908, p. 475.
- (50) Compagnon, Pierre, "Les collèges des Marianistes au Japon," *Annales des Missions Évangéliques de Paris*, n° 64, 1908, pp. 207-208. なお、コンパニオンは、一八八五年に来日し、一八八九年に宣教会の本部勤務を命じられてフランスに帰国した宣教師であり、マリア会を諷刺した『トバエ』の発行を同時代に知っていたと思われる。
- (51) 「暁星学校がフランス語教育に専心する学校なら、父兄は学校に子供を送らないであろうから、ドイツ語や英語を教える学校であ

ることを知らしめるビゴアの諷刺画は、学校にとっていい宣伝になったであろう。』Clavery, Edouard, *Extrême-Orient 1940*, Paris: Les Presses moderne palais-royale, 1940, pp. 47-48. クラヴェリーの触れたクロード・ファレールの著書は『*Le Grand Drame de l'Asie* (Paris, Flammarion, 1938) である。

(52) クラヴェリーは、一九三五年に日本版画に関する著書 (*L'Art des estampes japonaises en couleurs, 1680-1935*, Paris: les Presses modernes, 1935) を刊行しているが、この本ではビゴアの作品に触れていない。

(53) 「ポタン」は、噂話、ゴシップを意味するフランス語である。

(54) 芳賀徹他編『ワーグマン素描コレクション』幕末維新事件帖ほか』下巻、岩波書店、二〇〇二年、二八、三〇、一〇二頁。

(55) エヴラールを項目に取り上げている事典には、下記のものなどがある。青山玄「エヴラール」『日本キリスト教歴史大事典』教文館、一九八八年、一八八―一八九頁。本井康博「エブラール」『新潟県大百科事典』別巻、新潟日報事業社、一九七七年、四九頁。

(56) 山本四郎『評伝原敬』上巻、東京創元社、一九九七年、三六一四〇頁。前田蓮山『原敬伝』上巻、高山書店、一九四三年、一四五―一五五頁。エヴラールは、原敬の上海滞在時、彼に手紙（一八八四年四月三十日）を送っているが、その文面は原をカトリック信者として気遣ったものである。原敬文書研究会編『原敬関係文書』第三巻、日本放送出版協会、一九八五年、五四三頁。なお、原が明治初年に一時期学んだカトリック学校「マリン塾」は、後に『クーリ

エ・ドュ・ジャボン』の攻撃を受けることになるジャン＝マリ・マラン神父（本論第一章）が開いていた私塾である。

(57) ヴィリオンが、一八八九年、上長のミドンに命じられて、京都から山口に転任した時期のことである。Villon, Aimé, *Cinquante ans d'apostolat au Japon*, Hong Kong: Imprimerie de la Société des Missions Étrangères, 1923, pp. 341-342. 池田敏雄『ビリオン神父：現代日本カトリックの柱石：慶応・明治・大正・昭和史を背景に』中央出版社、一九六五年、三一一―三一二頁。

(58) 一九〇八年に来日したイエズス会のフランス人神父アンリ・ブシェーも、エヴラールが死去した時、ラテン語の日記（一九一九年五月四日）に次のような言葉を残している。「エヴラール師死去。修道者の友であった。いつも多くの修道会が日本にくるよう努力した。また長年のあいだ大使館の通訳をして、たくさんの事を理解し、多くの友人があった。神の人といえる」上智大学史資料集編纂委員会編『上智大学史資料集』第一集、上智大学、一九八〇年、一六八頁。

(59) 須長泰一「フランス人医師が見た明治初期の日本―私立新潟病院初代外国人医学教師ヴィダルの旅行記『新潟から江戸へ（日本）』」『日本医史学雑誌』第四九巻、第三号、二〇〇三年、五〇六頁。

(60) トク・ベルツ編（菅沼竜太郎訳）『ベルツの日記』上巻、岩波書店（岩波文庫）、一九七九年、三六五頁。

(61) 楠家重敏『ネズミはまだ生きている―チェンバレンの伝記』雄



- 松堂出版、一九八六年、二九九—三〇〇頁。エヴラールは、一八八六年にチェンバレンと共に羅馬字学会の委員に立候補しており、この時期すでに彼との交友関係は結ばれていたのではないかと思われる。『羅馬字会の事務委員候補者』『東京日日新聞』一八八六年二月十四日（『新聞集成 明治編年史』第六卷、本邦書籍、一九八二年、二四一頁）。
- (62) 長岡祥三訳『アーネスト・サトウ公使日記』1、新人物往来社、一九八九年、九七、一四四—一四五、一九九頁。長岡祥三、福永郁雄共訳、同上、2、一九九一年、一六六頁。
- (63) エヴラールは、一八九七年、『国民之友』の英語版『ファースト』に日本社会の現況に関する仏文の記事を寄稿している。Evrard, Félix, “Coup d’œil rétrospectif sur la situation impériale jusqu’à nos jours,” *The Far East*, Vol. II, n° 9, september 1897, pp. 403-413; n° 10, october 1897, pp. 498-507.
- (64) 「エフ、エー、エブーラル氏」卯九会編『内地雑居ニ対スル諸大家之意見』後編、広益図書、一八九九年（稻生典太郎編『内地雑居論資料集成』第五卷〈原書房、一九九二年〉に収録）。
- (65) 「外人の併合観…エブラル氏談」『読売新聞』一九一〇年八月三十日。「羅馬法王は禱らじ」同上、一九一一年十月十四日。なお、『読売新聞』が二二〇〇号を迎える時、エヴラールは同新聞社に祝辞を送っている。同上、一九一〇年十月四日。
- (66) エヴラールは、『東京朝日新聞』の訪問記者に対して、かつて年に数回宮中に上がって明治天皇に拝謁する機会をもっていたことを語っている。「老宣教師の感嘆」『東京朝日新聞』一九一二年八月一日。
- (67) 注(17) 前掲書。
- (68) *Momotarô ou le premier-né de la Pêche*, Tôkyô: Kôbunsha, 1886. 石澤小枝子「ちりめん本のすべて：明治の欧文挿絵本」（第二版）、三弥井書店、二〇〇五年、一〇二頁。
- (69) AMAE, CP, Japon, Vol. 35, DP n°185, J. A. Sienkiewicz au Ministre des Affaires étrangères, Tôkyô, 4 octobre 1891. CP, Japon, Vol. 37, DP n° 93, Victor Collin de Plancy au Ministre des Affaires étrangères, Tôkyô, 22 août 1892.
- (70) AMAE, Papier Agents (PA), V. Collin de Plancy, Vol. 4, J. A. Sienkiewicz à V. Collin de Plancy, Paris, 27 juin, 1892. CP, Japon 37, DP n° 93, V. Collin de Plancy au Ministre des Affaires étrangères, Tôkyô, 22 août 1892. エヴラールは一九〇〇年にレジオン・ドヌール勲章を授与されている。
- (71) 『パリ外国宣教会年次報告』第一卷、一〇八、一二五—一二六頁（なお、この翻訳書では、エヴラールの名前が、「エヴラール」、「エヴラー」、「エヴラル」など一定していない）。『読売新聞』（一八九〇年七月二十五日）の雑報は、シェンキヴィッチ公使の避暑にもエヴラールが同行していることを伝えている。
- (72) 松風編「偉人エヴラル師断片…日本の開化に隠れた功績」『声』第七八九号、一九四一年十一月、四二頁。
- (73) フランスの第二次軍事顧問団の一員として、一八七六年から七

八年まで滞日したルイ・クレットマンは、その日記（一八七七年十二月五日）に、彼がフランス公使館でエヴラルルやオズーフ神父、ボアソナードとともに、大久保利通や伊藤博文と会食をしたことを記している。Kreimann, Louis, *Deux ans au Japon (1876-1878)*, Tome 1, Marseille: à compte d'auteur, 1995, p. 127. ヴィリオン神父は、浦上四番崩れの殉教者の墓と追悼碑（一八九二年に建立）を萩に設立することを計画した時、エヴラルルに対して、井上馨から県知事あてに推薦書翰を送ってもらえるように斡旋を依頼している。Villon, Aimé, *op. cit.*, p. 387. 池田敏雄、前掲書、三六一頁。

(74) AMAE, CF, Japon, Vol. 35, DP n° 185, J. A. Sienkiewicz au Ministre des Affaires étrangères, Tokyo, 4 octobre 1891.

(75) 海老沢有道は、エヴラルルが、一八七一年当時、日本の官憲に対して自身の国籍をフランスからプロシアに変更して申告していたことを指摘している。行政上、エヴラルルの郷里のロレーヌ地方は、普仏戦争の敗北によりプロシアに割譲されていたという事情があったとはいえ、見方によつては、彼がフランス人としての愛国心を特に強く持ち合わせていなかったことのあらわれとも考えられるであろう。海老沢有道「脱走切支丹市郎右衛門一件」『維新変革期とキリスト教』新生社、一九六八年、二四〇—二四一頁。

(76) 「日本からの手紙」で、カトリック教会関連の事項を扱ったものは、『アンデパンダンス・トンキノワーズ』の下記の号である。一八九一年十一月十七日、十二月三日、十二日、一八九二年一月十四日、二月十一日、十六日、二十日、四月九日、三十日、五月二十

六日、六月八日、十六日、二十三日、二十八日、七月二十三日。この内、一八九一年十一月十七日の通信文が函館教区のベルリオーズ司教、一八九二年の一月七日の通信文がマリア会を扱っている他は、すべてエヴラルルを批判したものである。

(77) Céard, Jean, “Collin de Plancy,” Jacques Albin Simon, Laplanche, François (sous la dir.), *Les Sciences Religieuses: Les XIXe siècle 1800-1914*, Paris: Beauchesne, 1992, pp. 153-154. 床鍋剛彦「訳者あとがき」コラン・ド・プランシー（床鍋剛彦訳、吉田八峯協力）『地獄の辞典』講談社、一九九〇年、三三二—三三四頁。ただ、「フランス使節団の通訳として北京に渡った」というジャック・コラン・ド・プランシーに関する床鍋氏の記述は、外交通訳官として北京に赴任した息子との混同からきた誤りである。

(78) Lemaire, Elisabeth, “Le Collège de l’Immaculée Conception (1852-1908),” *Bulletin de la Société historique et archéologique du XIIème arrondissement de Paris*, n° 9, 1997.

(79) “M. Collin de Plancy, Commissaire du gouvernement français. Satisfactions accordées à la Mission,” *Annales de la propagation de la Foi*, n° 379, 1891, pp. 423-424. Teissier du Cros, Remy, “Victor Collin de Plancy à Seoul 1888-1906,” *Culture coréenne*, n° 52, 1999, pp. 16-22.

(80) コラン・ド・プランシーは、エヴラルルと彼の晩年に至るまで手紙（一九一八年八月十八日付のエヴラルルの書簡が最後のものがある）を交換しており、彼らが日本滞在中に深い信頼関係で結ばれていたことをうかがわせる。AMAE, PA, V. Collin de Plancy, Vol. 9.

- (81) AMAE, CP, Japon 37, DR, n° 25, 93, 95, V. Collin de Plancy au Ministre des Affaires étrangères, Tôkyô, 27 janvier, 22, 25 août 1892.
- (82) ミシヨーがコラン・ド・プランシーに送った手紙（一八九一年十一月十一日付）と内容の公使館批判が「日本からの手紙」『アンデパンダンス・トンキノワーズ』（一八九一年十二月三日）にも表明されていること、「日本からの手紙」の通信には、匿名に交じって彼の実名で通信文（一八九二年七月十二日、十一月十六日）が送られていること、ミシヨーは一八九二年の夏に日本を離れて仏領インドシナに移っているが、「X」署名の「日本からの手紙」も同時期に終了していることなどが、ミシヨーが匿名通信文の筆者と考えられる大きな理由である。また、同時期に『クリリエ・ダイフォーン』に筆名（「Vaccarinasen わかりません」）で連載されていた日本文化論でもエヴラールが批判されているが（一八九二年五月二十六日）、この筆名で書かれた別の通信文（一八九二年七月二十四日）には、筆者がエドモン・ド・ゴンクールから手紙を受け取り、北齋に関する伝記的情報を求められたことが語られており、この匿名の筆者がミシヨーであることは明白である。以上からして、ミシヨーが『アンデパンダンス・トンキノワーズ』と『クリリエ・ダイフォーン』の匿名通信文の筆者であることは間違いないと考えられる。
- (83) ミシヨーと同じくエドモン・ド・ゴンクールの協力者であった林忠正は、ミシヨーの提供した北齋に関する情報が誤りの多いものとして批判的であった。木々康子『林忠正とその時代：世紀末のパリと日本美術』筑摩書房、一九八七年、一七五頁。
- (84) Proschan, Frank, ““Syphilis, Opiumania, and Pederasty”: Colonial Constructions of Vietnamese (and French) Social Diseases,” *Journal of the History of Sexuality*, Volume 11, n° 4, October 2002, p. 610.
- (85) Michaut, Paul, *Contribution à l'étude des manifestations de l'hystérie chez l'homme*, Paris: G. Steinheil, 1890. ミシヨーの没年はわからなすが、彼の名前は、一九一七年まで医師の年鑑（Guide Rosenwald）に現れる。ただ、一九二二年の年鑑には、彼の名前がみられないので、恐らく、一九一八年から二一年の間に亡くなったのではないかと考えられる。以上のミシヨーの伝記的事実に関しては、フランスの医歯学系大学間図書館（BIUM）のベルナデット・モリトール（Bernadette Molitor）氏のご教示をいただいた。ミシヨーと日本との関わりに関しては稿を改めて論じたい。
- (86) ミシヨーの名前は、エドモン・ド・ゴンクールの『日記』に八回現れている。また、下記の博士論文が、ゴンクールに送られた彼の書簡を紹介している。Takeo, Yamamoto, «L'art japonais du XVIII<sup>e</sup> siècle», d'Edmond de Goncourt: genèse d'un projet interrompu (1888-1896), Thèse (Université Paris IV), 2007, pp. 107-118.
- (87) もっともミシヨーの日本文化の理解が極めて不十分なものであったことも事実で、『アンデパンダンス・トンキノワーズ』の通信文では、『古事記』の創世神話を紹介しながら、これを仏教の聖典であると書いている。「Lettre du Japon, "Indépendance Tonkinoise, n° 354, 16 avril 1892.
- (88) なお、この筆名の冒頭に「W」ではなく、「V」が使われている

るのは、「わかりません」と「ばか」をかけているのかもしれない。

- (89) 一八九一年の十月頃、ミシヨはアイヌ民族の調査のために北海道へ旅行をしている。「Introduction, Reising, Kristen (ed.), *Early European writings on Ainu culture: travelogues and descriptions*, Vol. 1, Tokyo: Edition Synapse, 2000, pp. 61-62. "Lettre du Japon." *Indépendance Tonkinoise*, n° 295, 26 novembre 1891.

- (90) Edmond de Goncourt et Jules de Goncourt, *Journal. Mémoires de la vie littéraire*, Vol. III, Robert Laffont, 2004, p. 1292. コンクールの日記（一八九六年六月三日）には、あるフランスの旅劇団が来日公演をした時、ビゴーが通訳を務めた逸話をミシヨが話したことが記されている。なお、ビゴーも来日前（一八八〇年頃）にコンクールと知り合っていた。清水勲「ビゴー年譜」、一六七頁。

- (91) Tuck, Patrick J. N., *French Catholic missionaries and the politics of imperialism in Vietnam, 1857-1914: a documentary survey*, Liverpool: Liverpool university press, 1987, pp. 249-250.

- (92) ミシヨの博士論文の献辞によると、彼の兄は軍人で、インドシナ植民地に赴任中、戦死したらしい。彼が、長くはない仏領インドシナの滞在時に、当地の新聞関係者と人脈をつくりえたのは、この亡くなった兄の存在が関わっていたのではないかと思われる。

- (93) Vacarinasen, "Un coin du Japon: Le théâtre japonais," *Le Courrier d'Haiphong*, 26 mai 1892.

- (94) 来日したプロテスタントやロシア正教の宣教師には、パリ外国宣教会のカトリック宣教師をイエズス会士と誤解している者がいた。

岡部一興編、有地美子訳『宣教師ルーミスと明治日本―横浜からの手紙』有隣堂（有隣新書）、二〇〇〇年、三九、四二頁。中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』岩波書店（岩波新書）、一九九六年、五七―五八頁。

- (95) 「イエズス会神話」を概観したものに、イエズス会のヨゼフ・ロゲンドルフによる「伝説ジェスイット考」（ヨゼフ・ロゲンドルフ編『イエズス会・再渡来五十周年を迎えて』エンデルレ書店、一九五八年、一〇〇―一三五頁）がある。また、一九世紀フランスの「イエズス会神話」を扱った研究には、下記のものがある。上垣豊「立憲王政下フランスにおけるイエズス会神話…モンロジエからミシュレまで」『史林』第八一卷、第三号、一九九八年。Cubitt, Geoffrey, *The Jesuit myth: conspiracy theory and politics in nineteenth-century France*, Oxford: Clarendon Press, 1993. Leroy, Michel., *op.cit.*, Fabre, Pierre-Antoine et Maître, Catherine (sous la dir.), *Les antijésuites: discours, figures et lieux de l'antijésuitisme à l'époque moderne*, Rennes: Presses universitaires de Rennes, 2010. なお、『パリ燃ゆ』において、パリ・コミューンを共感的に描いた大佛次郎は、未完に終わった晩年の大作『天皇の世紀』で、幕末フランス外交に関わったメルメ・カシオンを取り上げているが、彼をイエズス会神父と誤解したうえで、その性格を『外柔内残』で、俗人と異なるジェズイットの僧侶の性格」と形容している。この評価は、栗本鋤雲のメルメ・カシオン評に拠ったものであるが、メルメ・カシオンにイエズス会士の特徴をみるのは大佛独自のものであり、彼は、何らかの形で共和主



義者の流布していた「イエズス会神話」の影響を受けていたのではないかと想像される。大佛次郎『天皇の世紀』第六巻、朝日新聞社、一九七〇年、三六九頁。なお、この大佛のメルメ・カシオンに関する厳しい評価は、浦上四番崩れを扱った同書「旅の話」におけるパリ外国宣教会の宣教師への高い評価と興味深い対照をなしている。

- (96) “Lettre du Japon,” *L'Indépendance Tonkinoise*, n° 381, 26 mai 1892. 『クーリエ・ダイフォン』（一八九一年五月二十六日）。なお、この請願に関しては、コラン・ド・ブランシーは、東京と横浜に在住のフランス人約二〇〇名のうち、わずか二十名しか請願に署名していないと述べている。AMAE, CP, Japon 37, DP n° 93, V. Collin de Plancy à J. A. Sienkiewicz, Tôkyô, 22 août 1892. 一方、ビゴーの執筆と思われる『クーリエ・ダイフォン』の匿名記事（一八九二年十一月）では、横浜居留地のフランス人の五十一名中、四十五名の署名を集めた後、ジョルジュ・クレマンソーを通して本国の国民議会に提出されたが、その後、何の音沙汰もないままであると報じられている。AMAE, CP, Japon 37, DP n° 129, Annexe (III) la copie d'un article anonyme de Bigot dans *Le Courrier d'Haiphong* (20 et 27 novembre 1892).
- (97) 清水勲『「トバエ」の全体像』、一六六頁。
- (98) “Lettre du Japon (Yokohama, 21 février),” *Le Courrier d'Haiphong*, 15 mars 1891.
- (99) “Lettre du Japon,” *L'Indépendance Tonkinoise*, n° 389, 8 juin 1892.
- (100) 『パリ外国宣教会年次報告』第二巻、一九九七年、三七、二五八―二五九、二六九頁。パリ外国宣教会のカトリック宣教師は、カ

トリック信者の商人に対しても、日本に来るときに彼らは信仰心を失ってしまったと批判している。

- (101) 横浜市編『横浜市史』第四巻下、横浜市、一九六八年、四一四―四一五頁。『パリ外国宣教会年次報告』第二巻、一一二、一六一―一七、一八九―一九〇頁。
- (102) 『アーネスト・サトウ公使日記』1、六二頁。
- (103) “Lettre du Japon,” *L'Indépendance Tonkinoise*, n° 385, 1er juin 1892.
- (104) AMAE, PA, V. Collin de Plancy, Vol. 4, J. A. Sienkiewicz à V. Collin de Plancy, Paris, 27 juin, 22 octobre 1892. シェンキヴィッチの低評価にもかかわらず、後年、ドートルメルはパリ東洋語学校の日本研究者になり、ジュール・アダンも日本関係の著作を出版している。石澤小枝子、前掲書、一〇〇―一〇一頁。なお、ビゴーは『トバエ』でこの二人を取りあげているので、彼らと面識があったことには間違いない。清水勲『「トバエ」の全体像』、一六四頁。
- (105) AMAE, PA, V. Collin de Plancy, Vol. 4, J. A. Sienkiewicz à V. Collin de Plancy, Paris, 24 décembre 1892.
- (106) AMAE, CP, Japon 37, DP n° 93, V. Collin de Plancy au Ministre des Affaires étrangères, Tôkyô, 22 août 1892. PA, V. Collin de Plancy, Vol. 4, V. Collin de Plancy à J. A. Sienkiewicz, Tôkyô, 10 septembre 1892. 先述したように、ミシヨは、エドモン・ド・ゴンクール宛の手紙で、日本美術への関心が彼を日本に赴かせたと語っている。彼がクロブコウスキーに日本行きの便宜を図って貰っていたとしても、彼は年来、来日の動機をもっていたことを考えると、クロブコウスキーが彼を

日本に呼びよせたというコラン・ド・プランシーの報告書の一文は、やや行き過ぎたのではないかと考えられる。

- (107) AMAE, PA, Collin de Plancy, Vol. 4, Lettre de J. A. Sienkiewicz à V. Collin de Plancy, Paris, 22 octobre 1892.

- (108) AMAE, Correspondance consulaire et commerciale, Yokohama, Vol. 4, A. Klobukowski au Ministre des Affaires étrangères, Yokohama, 7 avril 1891. なお、クロブコウスキーは、一八九三年に日本に関する著書を変名で出版しているが、この著書から彼が日本の伝統や旧跡に関心をもっていた人物であったことがうかがえる。Dhasp, Jean, *Le Japon contemporain (Notes et impressions)*, Paris: Libraires-imprimeries réunies, 1893. なお、一八九〇年十月上旬、ビゴと親しかったプロスベル・フークは、クロブコウスキーに宛てた書簡で、あるフランス人が『ル・ポタン』の刊行前に、自身をモデルにした諷刺画を見たいとビゴに働きかけていたことを伝えている。翌年、クロブコウスキーは、ビゴの出版計画の助成依頼に関して当初好意的に幹旋を引き受けたように、彼は、この時期まで、ビゴの諷刺活動を知りながらも、特に問題視はしていなかったと思われる。AMAE, PA, Antony Klobukowski, Correspondance diverse 1, Lettre de P. Fouque à A. Klobukowski, 13 octobre 1890.

- (109) AMAE, Correspondance consulaire et commerciale, Yokohama, Vol. 4, Lettre de A. Klobukowski, Yokohama, 8 août 1891. クロブコウスキーは、ビゴの推薦を取り消した書簡で、スペイン公使に対するビゴの諷刺画については語らず、彼の芸術的才能や著作計画に対して疑義

の多いことを取り消しの理由に挙げている。

- (110) AMAE, CP, Japon 37, DP n° 129, Annexe (I): les correspondances entre le consul de Yokohama et le Ministre de France en 1891.

- (111) なお、横浜領事のクロブコウスキーは、ミシヨやビゴによる一連の反公使館キャンペーンの中で、全く批判や言及の対象に挙げられていない。これは、エヴラールが横浜領事館で働いていたわけではないので、ある意味では当然のこととはいえ、その言及の不在はやや奇妙なほどである。また、クロブコウスキーが、一八九〇年に、インドシナから日本に転任するとき、『クリーエ・ダイフォン』（一八九〇年七月三十一日）は彼のことを極めて好意的に報じている。このような反教権主義の立場に立つものの間で、彼が批判を免れている事実は、彼が反教権主義者として名高い政治家ポール・ベールの女婿であったことが大きかったのかもしれない。また、クロブコウスキーは、フリーメーソンの会員でもあった。Ligon, Daniel (sous la dir.), *Dictionnaire de la franc-maçonnerie*, Paris: Presses universitaires de France, 2004, p. 679. 彼は、後の仏領インドシナ総督時代（一九〇八―一九一〇年）、世俗化政策をとりながらも、統治上の現実的利害から、キリスト教徒との協力を重視するようになった人物であり、心情的にカトリック教会に好意をもっていなかったことは明らかである。Daughton, James Patrick, *An empire divided: Religion, republicanism, and the making of French colonialism, 1880-1914*, New York: Oxford University Press, 2006, pp. 109-114, 117. Tuck, Patrick J. N., *op. cit.*, pp. 286-289. クロブコウスキーは、日本に関する著書で、

- 日本におけるキリスト教布教の成功の可能性に関して懐疑的な考えを述べているので、横浜領事時代も、在日宣教師の活動に対して特に好意的ではなかったことが想像される。Dhasp, Jean., *op.cit.*, pp. 274-279. ただ、クロブコウスキーは、一外交官として、自己の信条は別にして、日本の宣教師とも良好な関係を保つように務めていたように思われる。ジョルジュ・ブリュレ・デ・ヴァランヌ神父は、横浜領事がカトリック宣教師に対して常に大変丁寧な (courtois) な態度を取っていると日記に書き留めている。Le Japon d'aujourd'hui. *Journal intime d'un missionnaire apostolique au Japon septentrional*, Tous: A. Mamie et fils, 1892, p. 362.
- (112) AMAE, CP, Japon 37, DP n° 129, V. Collin de Plancy au Ministre des Affaires étrangères, Tôkyô, 31 décembre 1892.
- (113) AMAE, PA, Collin de Plancy, Vol. 4, Lettre de V. Collin de Plancy à J. A. Sienkiewicz, Tôkyô, 10 septembre 1892. 一八九二年九月の時期、『ル・ポタン』(第二期)の第二号から五号までは出版されていたようである。
- (114) “Lettre du Japon”, *L'Indépendance Tonkinoise*, n° 389, 8 juin 1892.
- (115) クロブコウスキーは、一八九二年に帝国ホテルで行われた天長節の舞踏会や園遊会に招待されており、著書でこれらの祝賀行事の模様を描いている。Dhasp, Jean., *op.cit.*, pp. 188-194.
- (116) AMAE, CP, Japon 37, DP n° 129, Annexe (II) les correspondances entre Bigot et Collin de Plancy en novembre 1892.
- (117) AMAE, CP, Japon 37, DP n° 129, Annexe (III) la copie d'un article anonyme de Bigot dans *Le Courrier d'Haiphong* (20 et 27 novembre 1892). また、『クーリエ・ダイフォン』には、他にも一八九二年後半期に公使館を批判した匿名記事が掲載されているが、ビゴーの筆であることも考えられる。Microcoque, “L'influence française au Japon”, *Le Courrier d'Haiphong*, 14 août 1892. “Lettre du Japon (Yokohama, 15 décembre 1892)”, *Ibid.*, 12 janvier 1893.
- (118) AMAE, CP, Japon 37, DP n° 129, V. Collin de Plancy au Ministre des Affaires étrangères, Tôkyô, 31 décembre 1892.
- (119) この諷刺画について、清水勲氏は、外国人神父の日本人女性に対する男性的興味を描いているのではないかと解釈している。清水勲『ビゴーが見た日本人：諷刺画に描かれた明治』講談社（講談社学術文庫）、二〇〇一年、一九二―一九三頁。
- (120) 『横浜バード』の刊行年に関しては諸説があったが、英字新聞『ジャパン・ウィークリー・メール』*The Japan Weekly Mail*の一八九二年十一月五日の記事にこの詩画集の出版が伝えられているので、一八九二年の刊行であることは明白である。
- (121) ビゴーは、『トバエ』の諷刺画で、『ジャパン・ガゼット』と同じ立場に立って日本政府を批判していたことがあり、同紙の主張に共感をもっていたと思われる。清水勲「解題」芳賀徹他編『ビゴー素描コレクション：明治の世相』第二巻、岩波書店、一九八九年、一四〇頁。
- (122) “Lettre du Japon”, *L'Indépendance Tonkinoise*, n° 389, 8 juin 1892; n° 402, 23 juin 1892.

(123) 表紙に記載された販売場所は、第二号では、横浜六十二番地のアンドレ宅、神戸五六番地の居留地ホテル、同八十番地のオリエンタル・ホテル、大阪のユニオンクラブ、京都の京都ホテル、東京の東京ホテルであり、第三号から六号までは、横浜五十一番地のカルティ宅、同一三三番地のサルデーニュ宅、神戸五六番地のオテル・デ・コロニー（居留地ホテル）、同八十番地のオリエンタル・ホテルとなっている。定価は、第五号のみ二円で、それ以外の号は一円五十銭である。

(124) エレーヌ・コルヌヴァン“Georges Bigot: L'artiste aux deux visages”「ジョルジュ・ビゴー・ふたつの顔を持つ画家」（杉村浩哉、前堀信子訳）、酒井忠康、杉村浩哉、小松崎拓男編集『ジョルジュ・ビゴー展：明治日本を生きたフランス人画家』読売新聞社・美術館連絡協議会、一九八七年、二六、三二頁。

(125) 第二号は一七頁、三号は一六頁、四号は一六頁、五号は一五頁、六号が二〇頁である。なお、著者が原本を見したのは第六号のみであるが、この号の諷刺画には全て彩色がなされている。

(126) “Lettre du Japon,” *L'Indépendance Tonkinoise*, n° 389, 8 juin 1892. 「エラル」の周囲に屍を置く趣向は、同号の他の頁（II-16）でも行われている。

(127) 『ル・ポタン』作中のコミューナルに関して、コラン・ド・ブランシーは、外交報告書で、「ギベール」という人物をモデルにしていると述べているが、彼に関して具体的な説明を行っていない。恐らく、それは外交当事者にとって説明の必要のない人物であった

ことを示しているよう。当時、在日公使館には同名の通訳官（アメデ・ギベール Amédée Guibert）がいたので、ビゴーの製作動機から考えて、この人物である可能性が高いと思われる。このギベールの名前は、一八九二年度の東京在住フランス人の名簿に確認できる。

AMAE, Correspondance consulaire et commercial, Tôkyô, Vol. 9, V. Collin de Plancy au Ministre des Affaires étrangères, Tôkyô, 27 janvier 1893.

(128) Dixmier, Michel, Lalouette, Jacqueline, et Pasmonik Didier., *La République et l'Eglise: Images d'une querelle*, Paris: La Martinière, 2005, pp. 34-37.

(129) Jacquemet, Gérard., *Belleville au XIXe siècle du faubourg à la ville*, Paris: Editions de l'Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales, 1984. Ch. VIII: Un bastion du socialisme.

(130) AMAE, CP, Japon 37, DP n° 129, V. Collin de Plancy au Ministre des Affaires étrangères, Tôkyô, 31 décembre 1892.

(131) こっでビゴーに作品を参照されているジャン＝ポール・ローランスは、反教権的な主題（異端審問官など）を好んで取り上げるフランス人の画家であった。Françoise, de Vergnette., “Portrait de Jean-Paul Laurens en homme exemplaire,” *Jean-Paul Laurens, 1838-1921: Peintre d'histoire*, Paris: Réunion des musées nationaux, 1997, pp. 66-67.

(132) なお、ヴォジラール通りの近辺には、マリア会の経営する名門校スタニスラス学園があった。ビゴーは、マリア会とマリスト会を混同していたので、マリスト会と書きながらもスタニスラス学園を念頭に置いていた可能性も考えられる。ビゴーの読んでいた可能性



のあるアリアンス・フランセーズの会報は、暁星学校を「パリのスタニスラス学園の分校」として紹介している。*Bulletin de l'Alliance Française*, n° 42, 1892, p. 124.

(133) 『ル・ポタン』の第二号には、カトリック教会の神父や修道士が、教会の火事の消防につとめる場面(Ⅱ-12)がある。普仏戦争時、コラン・ド・プランシーの母校である聖母マリアの無原罪学園のイエズス会神父達は、救急隊員としても活躍していたので、これを諷刺したものと考えられる。Lemaire, Elisabeth, “Le Collège de l’Immaculée Conception pendant la guerre de 1870 et la Commune,” *Bulletin de la Société historique et archéologique du XV<sup>ème</sup> arrondissement de Paris*, n° 10, 1997, pp. 28-29. また、ビゴーには、一八九二年三月、在日フランス公使館のぼや騒ぎの際、マリア会士が消防に駆け付けたことも念頭にあったであろう。“Fire at the French Legation,” *The Japan Weekly Mail*, 26 March 1892.

(134) 『ル・ポタン』の別のある場面でも、登場人物(「ペルシー」)が、「エラルル」に向けて、「あなたの宣教師団とマリア会」と語る箇所があり、ビゴーが「パリ外国宣教会」の名称を知らなかったことが確認できる(Ⅵ-11)。なお、ビゴーも署名したと思われるエヴラルルの外交通訳官の罷免を求める在日フランス人の請願書(一八九二年五月九日)には、「外国宣教会 Missions étrangères」の一文が見えるので、当時のフランス人が全くパリ外国宣教会の名前を知らなかったわけではなかったであろう。

(135) “Lettre du Japon,” *L’Indépendance Tōkinoise*, n° 389, juin 1892.

(136) 『仏文雑誌』に関する研究論文には、下記のものがある。白鳥義彦「明治期の日仏関係と『佛文雑誌』」「日仏教育学会年報」第二八号、一九九九年。Jūro, Iwatani, “La publication de la *Revue française du Japon* (1892-1897): l’infructueuse tentative d’un juriste français, conseiller auprès du gouvernement japonais,” *Japon Pluriel* 3, Arles: Éditions Philippe Picquier, 1999. なお、雄松堂から同誌の復刻版(二〇〇七年)が出版されている。

(137) ただ、ミシヨは、『仏文雑誌』に触れたこの記事で、ボアンナードに対して全く言及していない。『アンデパンダンス・トンキノワーズ』の匿名通信文(一八九二年六月二十八日)で、彼は、ボアンナードの編纂した民法典が帝国議会で受け入れられなかったことを嘆いている。恐らくミシヨは、在日フランス人の中で日本政府に対して最も大きな影響力をもつボアンナードに対して、敬意をもっていたのであろう。なお、『クリーエ・ダイフォン』は、一八九三年一月五日にも、『仏文雑誌』(第十一号、一八九二年十二月)に掲載されたインドシナ植民地関連の記事を批判的に取り上げている。“Les Français en Indochine par un officier français,” *Le Courrier d’Haiphong*, 5 janvier 1893.

(138) 『ル・ポタン』では、「ヴォジラルル雑誌」の購読予約者には、特典としてルルドの水を入れた瓶が進呈されるというような諸誼も行われている(Ⅳ-7)。このような趣向が取られていたため、蛭原八郎のように、ビゴーが当時横浜で発行されていた欧文のカトリック新聞を諷刺したのではないかと誤って推測している例も存在す

る。蛭原八郎、前掲書、一五二頁。

- (139) 『パリ外国宣教会年次報告』第一巻、聖母の騎士社、一九九六年、一九七頁。パリ外国宣教会の『年次報告』でも、『仏文雑誌』に関して報告されている。同上、三二〇頁。ただ、同書の翻訳では、仏学会は、『日仏協会』と訳されている。

- (140) Michel, Ernest, *op. cit.*, p. 267. 一八九一年に来日したフランス人旅行者は、東京仏文会（仏学会の前身）で、ボアソナードが自由思想を批判し、キリスト教を擁護する講演を行ったことを旅行記に書いている。

- (141) 白鳥義彦、前掲論文、四九頁。

- (142) 安岡昭男「仏学会に関する基礎的研究（Ⅱ）——仏学会の活動／会員名簿——」『法政大学文学部紀要』第四三号、一九九七年、一五一頁。この仏学会には、マリア会のヘンリックも来日後に入会している。同上、一五二頁。Ambrogio, Albano (ed.), *op. cit.*, pp. 124-125.

- (143) *Compte rendu de la 5ème Assemblée générale de la Société japonaise de Langue Française (Séance du 18 Novembre 1891)*, 1892, pp. 1, 4.

- (144) “Chronique (l'abbé Eyraud)”, *Revue française du Japon*, n° 21, 1893, pp. 321-323. 『仏文雑誌』に無署名で掲載されている法律や法令の翻訳は、大部分、エヴラール神父が関わっていたのであろう。フランシスク・マルナスも、著書『日本キリスト教復活史』（みすず書房、一九八五年）の緒言で、エヴラールから日本の法令の仏訳で協力を受けたことに感謝の意を述べている。

- (145) ビゴーは、『ル・ポタン』の第五号で、ボアソナードの起草し

た民法典が帝国議会に通らなかったことをとりあげているが（V-9、10）、この諷刺が在日フランス人社会の間で大きな反響を呼んだことをコラン・ド・ブランシーは外務省に報告している。AMAF, CP, Japon 37, DP n° 129, V. Collin de Plancy au Ministre des Affaires étrangères, Tôkyô, 31 décembre 1892. この箇所画（V-10）は、横浜開港資料館の「来日一〇〇年記念 ビゴー展」（一九八二年）の展覧会カタログ（非売品）で紹介されている。なお、ビゴーは、『仏文雑誌』（第四巻、第三号、一八九五年三月）に挿絵を三葉寄せているが、これはボアソナードがフランスに帰国した後のことである。

- (146) Claude, Maitre, “Un japonologue français: Noël Petit” *Japon et Extrême-Orient*, n° 4, 1924, pp. 294-295.

- (147) 『ル・ポタン』の諷刺画に現れる神父たちの服装に注意すると、「エラール」に率いられる修道士がフロックコート姿で描かれているのが目に付く（Ⅱ-6、12）が、彼らは、マリア会の修道士を表していると思われる。『トバエ』の画で、マリア会士がスータン姿で描かれていたことは先に見た通りであるが、『ル・ポタン』を見る限り、この時期、フロックコートを着用していたマリア会士が一般的になっていたのであろう。ただ、日本のマリア会士がフロックコートを常用しはじめた時期に関しては諸説があつて定かではない。Cf. Lebon, Pierre, “L’apostolat par l’éducation au Japon,” *L’apostolat missionnaire de la France*, II<sup>e</sup> série, Paris: Pierre Tégus, 1926, p. 213. J・ヴェルニエ『日本マリア会史 一八八七年—一九三七年』マリ

ア会、一九八七年、四九頁。

(148) 「ヴォジラール学校」の内壁には「くたばれ共和政フランス」(A bas R.F.)、「アンリ四世万歳」などの落書きが描かれている。

(149) 「Lettre du Japon», *L'Indépendance Tonkinoise*, n° 389, 8 juin 1892. 前掲注(127)の東京在住フランス人名簿による。

(150) 「Lettre du Japon», *Ibid.*, n° 389, 8 juin 1892.

(151) 先述したように、『仏文雑誌』は、日本におけるカトリック教会の教階制の成立について、第三号(一八九二年五月)で取り上げていた。「La hiérarchie épiscopale au Japon», *Revue française du Japon*, n° 3, 1892, pp. 87-88.

(152) 『トバエ』(第四八号、一八八九年二月一日)では、マリアンヌが、日本(日本人の子供で表されている)を導いている画が掲載されている。清水勲『「トバエ」の全体像』、一五八頁。

(153) 及川茂氏は、ビゴーがフランス帰国後に多数のエピナール版画を製作していたことを明らかにしたが、その時期の彼の作品にはキリスト教に関連した物語を題材にしたものが確認される。及川茂『フランスの浮世絵師ビゴー・ビゴーとエピナール版画』木魂社、一九九八年、一二四、一三一、一四八頁。この民衆向けの版画に関わっていた時期(一九〇六―一九一六年)、ビゴーがキリスト教に好意的になっていたのか、もしくは反教権的な感情をもちながらも生計のために割りきって製作していたのかどうかは、定かではない。

(154) 他にも Ignorant brothers & com (I-10) という Ignatius Brother を皮肉ったような字句もみられる。

(155) Lalouette, Jacqueline., *La République anticlericale XIXe-XXe siècles*, Paris: Seuil, 2002, pp. 311, 347-348.

(156) エヴラールの一時帰国の際、『仏文雑誌』の時評は、エヴラールの送別の見送りにフランス公使一家や同僚の宣教師たちをはじめ、欧米人や日本人の多くの知友が集まってきたことを伝え、それを彼の人の洗練された社交性(urbanité)に帰している。「Chronique», *Revue française du Japon*, n° 21, 1893, pp. 321-322.

(157) 『パリ外国宣教会年次報告』第一巻、二七三頁。先述したように、パリ外国宣教会のコンパニオン神父(彼は、一八八九年、『ル・ポタン』の発刊前の時期に、パリに帰国している)が、一九〇八年、ビゴーのマリア会に対する諷刺画に言及した際、それが『トバエ』に掲載されていたにもかかわらず、『ル・ポタン』に掲載されていたと誤解していた。この事実は、彼の記憶の中でマリア会への諷刺とエヴラール神父への諷刺とが混同されていたためと考えられるので、宣教会本部にもこの出来事の情報は何らかの形で伝わっていたと考えられる。

(158) 清水勲氏は、現存しているビゴーの雑誌にフランス公使館の蔵書印の押されたものの確認できるとや、『トバエ』にシェンキヴィッチ公使を描いた画の存在することから、ビゴーが公使館と密接な協力関係にあつて、公使館が彼の諷刺活動をフランスの対外的プロパガンダとして評価していた可能性を指摘し、『トバエ』の刊行に際して、ビゴーは公使館から経済的援助を受けていたのではないかと推測している。清水勲『「トバエ」の全体像』、一六〇、一六二、

一六六頁。しかし、以上の論述でわれわれが確認してきたように、ビゴはシェンキヴィッチやコラン・ド・プランシーから要注意人物とみなされていたのが実情であり、公使館が彼の刊行物を所蔵していたとすると、それはビゴが監視対象となっていたがために彼の諷刺画が集められていたと解釈するほうが妥当であろう。

- (159) AMAE, CP, Japon 38, DP n° 7, Lettre à J. A. Sienkiewicz, Paris, 18 mars 1893. ビゴを仏領インドシナの裁判所に召喚すべきであるとするコラン・ド・プランシーの意見に対して、ある本省職員の見解(無署名)がシェンキヴィッチに送られているが、そこでは、ビゴの処分としてこの措置は適切ではなく、むしろ日本から彼を放逐する方がいいのではないかという考えが述べられている。

- (160) AMAE, CP, Japon 40, DP n° 50, Jules Harman au Ministre des Affaires étrangères, Tokyo, 30 octobre 1894. この外交報告では、ビゴが『ザ・グラフィック』誌の特派員として、『タン』誌の特派員のヴィルタール・ド・ラゲリーと『フィガロ』紙の特派員のフェルナン・ガネスコと共に中国に行ったことが述べられている。『シヨッキング・オ・ジャポン *Shocking au Japon*』の著者であるガネスコに関しては、同書の絵を描いたビゴと同一人物であるという説が唱えられたことがあった(山口順子「ビゴ研究の流れ―研究書目補遺とともに」『郷土よこはま』第一〇一号、一九八四年、四頁)が、ガネスコとビゴの動向に関して彼らの名前を挙げて報告しているこの外交文書は、両者が別人であることを公的に示したものである。

- (161) AMAE, CP, Japon 44, DP n° 175, Jules Harman au Ministre des

Affaires étrangères, Tokyo, 9 août 1895. この外交報告では、書名は挙げられていないが、ビゴが『極東における古き英国』*Old England in the Far East* (一八九五年)を出版したことが報告されている。